

# 聖山公園遺跡 V

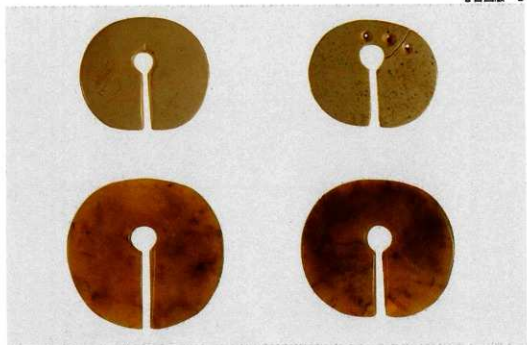
— 根古谷台遺跡発掘調査概要 —

昭和63年 2月

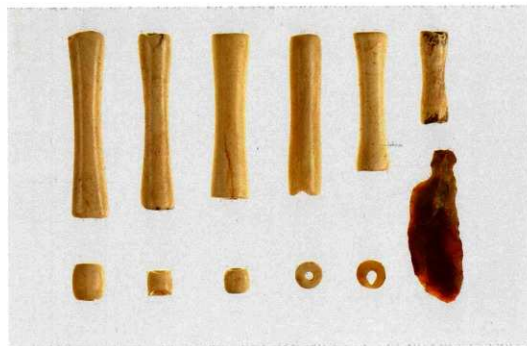
宇都宮市教育委員会



棋古谷台遺跡透景（北西上空から）



(1) 扶杖耳飾 (上 100号墓坑, 下 117号墓坑)



(2) 114号墓坑出土遺物一括

## 発刊にあたって

聖山公園(根古谷台)遺跡の発掘調査は、市営の墓地公園造成に伴って実施したものです。したがって、当教育委員会が調査を造成主管課から依頼され担当するにあたっての前提は、記録保存を目的とした発掘であり、現実には調査終了地域から順に墓園として整備されてきました。

発掘調査は、当初昭和57年から5か年、対象面積約6万㎡の計画のもとで実施しましたが、予定通り完了するからと思われた昨年度(調査最終の62年度)になって、予想もしなかった縄文前期集落跡と思われる遺構を確認し、1か年調査を延長することとしました。

昨年の夏から本格的に調査に取り組んだ結果、想像していた以上に重要な縄文前期の大集落跡であることが判明しました。遺構は、関東地方では例のない建物跡を含む60数軒と多くの墓跡からなり、数基の墓塚から出土した耳飾り首飾り等の装飾品は全国的にも極めて希少なものと認められるものです。

調査は、一応11月末をもって終了しましたが、この遺構は研究者のみならず一般の多くの人々の関心を呼び、これに伴って保存できないものかとの声が行内を含め多方面からあがり、その結果、開発計画から除外することになりました。保存が決定された縄文前期集落跡は、聖山公園遺跡内ですが、遺構が所在する地の小字を付して「根古谷台遺跡」と称し、記録保存する他地区と区別することとしました。

本書は、この恒久的保存が保証された根古谷台遺跡を中心とした概報ですが、本格的な整理作業に入っていない段階でとらえずまとめられたものであることを御理解いただいて、御高覧いただければ幸いです。

末文になりましたが、6年間の長期にわたって終始御教訓いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興事業団の3指導機関及び指導委員の国土館大学教授 大川清氏、早稲田大学教授 久保哲三氏、宇都宮市文化財保護審議委員会委員 瑞 静夫氏、同 小堀時藏氏、同 大金宣亮氏、同 橋本澄朗氏に対しまして厚くお礼申し上げます。また、根古谷台遺跡につきましては、上記の諸先生以外に文化庁記念物課の先生方に御指導いただきました。あらためて謝意を表します。

なお、根古谷台遺跡の保存に伴う同地区の整備を予定しておりますので、上記の関係各位をはじめとして関係する方々の一層の御指導、御支援をお願い申し上げます。

昭和63年2月

聖山公園遺跡発掘調査団長  
(根古谷台遺跡)  
宇都宮市教育委員会教育長 後 藤 一 雄

## 例 言

- 1 本書は昭和61年4月～昭和62年11月に実施した宇都宮市上欠町に所在する聖山公園遺跡（宇都宮市第2聖園造成地）の第5次発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査組織に基づき実施したものである。今回調査を実施したのは、聖園造成予定地の最終地区約8500㎡である。当初の計画では5か年目の昨年（昭和61年）度をもって調査を終了する予定であったが、予想以上に遺構の密度が濃く、かつ資料的に貴重なものが多く検出されたことから、調査期間を約1年延長したものである。
- 3 本遺跡はこれまで（第1次～4次調査）古墳時代の集落と墳墓を中心としたものとして、大きく一つの聖山公園遺跡ということであらえてきた。しかし、今回の第5次調査地区では本文中明らかにするとおり極めてまとまりの強い縄文時代前期の遺構群が検出された。そこで、将来的なことも考慮に入れ、この第5次調査地区に限っては字名から根古谷台遺跡と呼ぶことにした。ただし、古墳時代以降の遺構及び土坑（墓墳も含む）については、第1次調査からの通し番号をそのまま使用した。
- 4 遺構の実測および写真撮影等は、金田信夫、津布菜一樹の協力を得て梁木誠がこれにあたった。また、遺物の整理および写真撮影等に関しては国士館大学の大門直樹氏および栃木県立博物館の橋本澄朗、上野修一両氏に御協力を得た。記して感謝の意を表する。
- 5 本書の編集は梁木が、また執筆は定岡明義、手塚英男との協議を踏まえ、梁木がこれにあたった。なお、編集・執筆に関しては、文化庁記念物課の岡村道雄氏より御指導・御助言を賜った。記して感謝の意を表する。
- 6 発掘調査中、次の方々より御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略、順不同）

大野康司、富樫泰時、稲野裕介、佐藤信行、阿部正光、村田晃一、目黒吉明、大越道正、吉田秀亨、森 幸彦、長島雄一、根本信孝、斉藤弘道、阿久津久、桜岡正信、石坂 茂、藤巻幸男、原 雅信、松村和男、岩崎泰一、能登 健、赤山容造、坂口 一、小島敦子、宮田 毅、大塚昌彦、小林良光、栗原文蔵、谷井 彪、宮崎朝雄、梅沢太久夫、井上 肇、小川良祐、高橋一夫、金子真土、浅野晴樹、細田 勝、黒坂敏二、大塚孝司、寺内正明、中村誠二、大塚和男、西川 制、奥野麦生、佐々木保俊、荒井幹夫、小出輝雄、新井和之、春成秀爾、西木豊弘、堀越正行、篠原 正、西山太郎、菊地敏記、西村正衛、小林達雄、永峯光一、大塚初重、河原純之、安原啓示、岡村道雄、佐久間豊、松村恵司、原田昌幸、橋本博文、早川 泉、比田井克仁、小島正裕、江里口省三、小坂井孝修、中西 充、可见通宏、小藁一夫、丹野雅人、岩橋陽一、服部敬史、村田文夫、山本輝久、鈴木保彦、戸田哲也、坂本 彰、石井 寛、長谷川厚、小杉 康、笹沢 浩、宮下健司、

郷道哲章、渡辺 誠、石野博信、林部 均、小林行雄、千田剛道、宮本長二郎、田中 琢、水野  
 正好、古田武彦、清水信行、川原由典、竹沢 輝、岩淵一夫、岩上照朗、田熊清彦、石橋知明、  
 小森紀男、初山孝行、小森哲也、芹沢清八、田代 隆、塚本師也、鈴木 実、上野修一、三澤正  
 善、福田定信、矢島俊雄、木村 等、海老原都雄、青木健二。

●昭和61・62年度調査団組織

団 長	教 育 長	後藤一雄	指 導 機 関	栃木県教育委員会文化課	
副 団 長	教 育 次 長	上野 渡		栃木県立博物館	
事 務 局 長	社会教育課長	塚田隆一		栃木県文化振興事業団	
事務局長補佐	社会教育課長補佐	河越昌司			
事務局次長	文化振興係長	小林錦一	指 導 委 員	国士館大学教授	大川 清
事務局員	文化振興係	定岡明義		早稲田大学教授	久保哲三
(調査員)	(担当者)	手塚英男		市文化財保護委員	塚 静夫
		梁木 誠			小堀時藏
		小松俊雄			大金宣亮
		大塚雅之			橋本澄朗
		赤石澤亮	参 与	民 生 部 長	小林一右
		神野安伸		都市開発部長	大橋 勇
			幹 事	市民生活課長	古澤 一
				公園緑地課長	斎藤亨二
調 査 員 補	市文化財調査員	松本笑悦	調 整 担 当	市 民 生 活 課	南雄次郎
	本遺跡調査員	金田信夫			片野俊雄
	◇	津布菜一樹			菊地 博
	◇	矢板真雄			郷間俊夫
	◇	河越清美		駒山公園管理事務所	田村良一
				公園緑地課	大森功章
調査補助員	安生ミカ	池田友保	大塚 清	川津ミツエ	小林ミキ
	小林マサ	小松寛雄	斉藤イク	佐藤光子	島崎熊夫
	半沢ミネ	福田カネ	福田貴久栄	福田タイ	福田タイ
	堀田一夫	松本恵美子	松本和子	松本トシ	松本トリ
	味野和テツ	味野和紀子	森ヒロ子	谷中一郎	山崎トキ
	吉澤良助	吉澤キミイ	渡辺フミ		

# 目 次

- 発刊にあたって

- 例 言

## I 立地と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形	1
2 周辺の遺跡	1

## II 調査の経過

1 調査に至るまでの経過	8
2 第1～4次調査の概要	8
3 第5次(根古谷台遺跡)調査の経過と概要	9

## III 検出された遺構と遺物

1 竪穴住居跡	17
2 長方形大型建物跡	21
3 方形建物跡	23
4 掘立柱建物跡	25
5 墓塚	28
6 集石	31

## IV まとめ

1 遺構について	32
2 遺物について	33
3 集落の変遷	35
4 問題点の整理	36

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺の遺跡分布図	5・6
第3図	周辺の縄文時代前期遺跡分布図	7
第4図	根古谷台遺跡調査地区図	10
第5図	標準上層図	11
第6図	根古谷台遺跡遺構配置図	13・14
第7図	根古谷台遺跡縄文時代前期遺構配置図	16
第8図	竪穴住居跡平面図	18
第9図	3号長方形大型建物跡実測図	22
第10図	1号方形建物跡実測図	24
第11図	4～7号掘立柱建物跡実測図	26
第12図	広場北西隅の墓塚群	29
第13図	117号墓塚遺物出土状態	30
第14図	101号墓塚遺物出土状態	30
第15図	根古谷台遺跡の竪穴住居跡	32
第16図	根古谷台遺跡の建物跡	32
第17図	栃木県内の縄文前期竪穴住居跡	32
第18図	根古谷台遺跡竪穴住居跡の変遷	34

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	5・6
第2表	竪穴住居跡一覧	19
第3表	長方形大型建物跡一覧	21
第4表	方形建物跡一覧	25
第5表	掘立柱建物跡一覧	27
第6表	墓塚一覧	28
第7表	墓塚出土遺物一覧	31



## 図 版 目 次

巻首図版 1	根古谷台遺跡遠景	
巻首図版 2	(1) 袂状耳飾	(2) 114号墓壙出土遺物一括
図版 1	根古谷台遺跡遠景	
図版 2	根古谷台遺跡遠景	
図版 3	根古谷台遺跡近景	
図版 4	根古谷台遺跡全景	
図版 5	(1) J-5号住居跡調査の経過	(2) J-5号住居跡
図版 6	(1) J-12号住居跡	(2) J-20号住居跡
図版 7	(1) J-7号住居跡	(2) J-22-27号住居跡
図版 8	(1) 1・2号長方形大型建物跡調査の経過	(2) 1・2号長方形大型建物跡
図版 9	(1) 3・4号長方形大型建物跡	(2) 5-7号長方形大型建物跡
図版 10	(1) 13・14号長方形大型建物跡の確認状況	(2) 13・14号長方形大型建物跡
図版 11	(1) 1号方形建物跡	(2) 3号方形建物跡
図版 12	(1) 4号掘立柱建物跡の確認状況	(2) 4号掘立柱建物跡
図版 13	(1) 住居・建物跡群の重複	(2) 広場の集石
図版 14	(1) 広場北西隅の墓壙群確認状況	(2) 広場北西隅の墓壙群
図版 15	(1) 101号墓壙玉類出土状態	(2) 114号墓壙玉類・石匙出土状態
図版 16	(1) 100号墓壙袂状耳飾出土状態	(2) 117号墓壙袂状耳飾出土状態
図版 17	(1) 住居跡の土器出土状態 (2) 石器の出土状態 (3) 炭化したクルミの出土状態	
図版 18	J-5号住居跡出土土器	
図版 19	(1) J-10号住居跡出土土器	(2) J-24号住居跡出土土器
図版 20	(1) 住居跡出土土器 (2) J-23号住居跡出土土器 (3) J-6号住居跡出土土器	
図版 21	(1) J-5号住居跡出土土器(1)	(2) J-5号住居跡出土土器(2)
図版 22	(1) 墓壙出土袂状耳飾	(2) 101号墓壙出土玉類
図版 23	(1) 114号墓壙出土玉類・石匙	(2) 墓壙出土土器

# I 立地と環境

## 1 遺跡の位置と周辺の地形

本遺跡の所在する宇都宮市上欠町は、宇都宮の市街地から西南西へ約5kmの地点にあり、西は鹿沼市に接している(第1図参照)。基本的には水田耕作を主体とした農村地帯であるが、すぐ西には鹿沼工業団地が控え、また近年、同町内に大規模な住宅団地(上欠団地)も造成されている。年々平地林が少しずつ減るとともに、町内各所に土取りの跡が露呈するという状況であり、都市化の波は着実に押しよせてきているものと言える。

栃木県の地形は大きく北西の山間地帯と南東の平野地帯に分かれる。県のほぼ中央に位置する宇都宮市は丁度この変換点付近にあり、北西城が那須・日光連山の裾野からのびる山地および台地、南東城が関東平野につながる平地という地形になっている。本遺跡が立地するのは、この北西山地帯から平野部に向けてせり出す細長い台地上であり、通称鹿沼台地の南東端部にあたる。

この南東に向って細長く延びる台地は、本遺跡付近で緩やかにカーブし、南へ約300mで端部となっている。台地の幅は遺跡地北西付近で約300m、南東へ向うに従って狭まり約150mとなり、台地上は幅100～150mの平坦面が続いている。台地の両側は、西が10～20度の緩やかな斜面、東が30～40度の急な斜面を形成し、それぞれ沖積低地の水田面に至っている。台地上平坦面の遺跡地付近の標高は118～120mであり、両側の低地からは15～16mの比高差がある。

本遺跡を載せる台地の両側には、姿川、武子川と呼ばれる小河川がそれぞれ南流している。東側を流れる姿川は、本遺跡付近で大きく蛇行し、台地東側斜面の裾部をえぐるような流路をとっている。また、武子川は台地西側緩斜面の裾部から200m前後の距離をおいてゆるやかに流れている。この二つの川は本遺跡を載せる台地の先端を過ぎたところで合流し、一本の姿川として、県南の平野部にそいでいる。なお、この姿川は本遺跡より約20km南の国分寺町で思川に合流し、さらに思川は約20km南の藤岡町遊水池で渡良瀬川に合流する。

## 2 周辺の遺跡

本遺跡が所在する姿川上流域は、栃木県内でも古くから遺跡の宝庫として知られてきた地域であり、発掘調査により明らかにされた遺跡も数多い。ここでは、周辺に所在する遺跡のうちから特に本遺跡との関連を考える上で必要となる縄文および古墳時代関係のものを抽出し、それらの概要をまとめることにしたい。

### (1) 縄文時代

第2図は本遺跡から半径2～3km以内に所在する遺跡の分布図であるが、姿川右岸、なかでも本遺跡から北西部にかけては、縄文時代集落跡の密度が非常に濃い。これらの遺跡の立地は、本遺跡



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

と同様な細長く延びた台地の先端部付近あるいは縁辺部であり、いずれも婁川に流れ込む小阿川に沿っている。時間的には前期から後・晩期と各時期にわたっているが、やはり中期のものが目立っており、逆に前期の確実なものは調査された上欠南遺跡(16)1例だけという状況である。ここで、発掘調査がなされた3遺跡について概要をまとめると次のとおりである。

**上欠遺跡(15)** 竪穴住居跡52軒、配石遺構13基、屋外土器埋設遺構24基、ピット244基等が検出された県内でも最大規模の集落跡である。出土土器は縄文時代中～後期の加曾利E式、称名寺式が主体であり、他に776点にものぼる打製石斧をはじめ多量な石器類の出土もみている。

**上欠南遺跡(16)** 竪穴住居跡1軒、土坑1基が検出され、出土土器から縄文時代前期の黒浜期のものであることが判明している。竪穴住居跡は5.9×4.4mの隅丸長方形のものであり、4本の支柱に棟持柱を持つ形態である。なお、花積下層式の破片も出土しており、周辺にはさらに古い時期の集落があるものとみられている。

**高尾神遺跡(19)** 竪穴住居跡19軒、袋状土坑11基等が検出されている。出土土器は縄文時代前期の阿玉台式、加曾利E1式が主体であり、他に豊富な石器類も出土している。

さて、以上のように中期に関しては発掘調査されたものも含めてかなり豊富な資料がみられるのに対し、本遺跡を理解する上で直接かわってくる前期あるいはその直前・直後のものとなると非常に希薄である。ただし、分布調査の精度や発掘調査をして初めて判るという面を考慮すれば、これを一つの傾向としてとらえることにはまだ疑問が残る。

ところで、第3図は少し広い範囲(本遺跡を中心に半径7～8km)で前期遺跡の分布状況を示したものである。全体的には、やはり北西山間部寄りの台地縁辺部に多く、南東平野部に向うに従って少なくなる傾向はみられる。ここで、仮りにこの遺跡の粗密の状況を素直に受けとめるならば、本遺跡の北東部約7kmの地点(3～7)と南西約6kmの地点(15～19, 23, 24, 28, 29)に集中する場所がみられ、他は散在する形である。つまり、これで見ると本遺跡は散在する遺跡のうちの一つであることになる。なお、この範囲に含まれる遺跡の中で発掘調査がなされているものには、前記した上欠南遺跡(16)の他に、運転免許センター内遺跡(17)、流通業務団地内遺跡(18)、三軒屋遺跡(21)、下坪遺跡(29)等があるが、いずれも本遺跡に比較すれば小規模な集落跡であり、竪穴住居跡の検出数でみれば、流通業務団地内遺跡の7軒が最も多い数である。また、それぞれの遺跡で検出されている竪穴住居跡は、いずれも通常の大きさのものである。

## (2) 古墳時代

集落跡に関しては、周辺地域(第2図)において発掘調査された例がまだない。もちろん分布調査等において土器片の散布をみる遺跡が相当数確認されているわけであるが、その内容、特に時間的なことについての判断となると困難な場合が多い。そこで、ここでは古墳そのものの分布状況を見て行くとともに、出土遺物や主体部等から内容の知られるいくつかの古墳または古墳群について触れてみることにしたい。

古墳の分布は東部の市街化された地域を除きほぼ全域にわたっているが、大きくみれば婁川沿岸、

それも特に右岸沿いに集中しているようである。また、標高が徐々に高まりやがて山地帯にさしかかる北部はやはり少なくなっており、特に姿川右岸においては本遺跡周辺が分布の北限に近い。また、立地あるいは占地一つの傾向としては、姿川に流れ込む小河川沿いの台地縁辺に集中するということが言える。以下、主な古墳または古墳群について簡単にまとめてみたい。

**稲荷古墳群(24)** 前方後円墳1基と円墳3基が現存する古墳群である。前方後円墳は相似形の周溝をもつ全長32.7mのものであり、葺石と埴輪の存在が確かめられている。円筒埴輪や周溝から出土した土師器環から6世紀後葉のものと考えられる。また、円墳のうちの一つは川原石小口墳の横穴式石室であることも確認されている。

**深津古墳群(37)** かつては十数基からなる古墳群であったが、現在は2基を残すのみである。このうちの1基が主墳とみられる通称愛宕塚古墳である。従来から円墳とされているが、墳丘斜面の状況からすると南側に短い前方部が存在した可能性も考えられる。推定では30m前後の規模とみられる。かつて出土したといわれる須恵器から、7世紀前半代のものと考えられる。

**下台原古墳群(29)** 前方後円墳1基と円墳11基が現存する古墳群である。主墳である下台原古墳は基壇状のテラスを有する前方後円墳であり、墳丘長57m、基壇長69m、周溝を含めた全長92mという規模をはこるものである。

**亀塚古墳(27)** 50mをこえる前方後円墳とみられるが、前方部は削平されている。現在、後円部墳頂近くに割石を小口横にしたような石室壁の一部をみることができる。位置的にも竪穴式石室の可能性が高いものである。円筒埴輪、須恵器、土師器等の出土が知られている。

以上の他にも、凝灰岩切り石積みの横穴式石室が開口する下砥上愛宕塚古墳(8)、小規模な前方後円墳を含む下砥上古墳群(10)や大塚古墳群(41)、さらには小規模な円墳だけから構成される亀ヶ池古墳群(2)、亀岡前古墳群(20)、工業団地東古墳群(38)など、それぞれに特徴的なあり方を示している。

さて、このようにみえてくると、本遺跡周辺における古墳の中では、亀塚古墳(27)の主体部に最も古い要素をみることができる。しかし、これにしても伴出遺物からでは前・中期的な色彩は薄い。小円墳等、未発掘の古墳が大半を占める中での推定ではあるが、概ね本地域における古墳造営は後期を中心に展開すると考えてよいであろう。

#### 参考文献

『宇都宮市史』原始・古代編 宇都宮市史編さん室 昭和50年

『鹿沼市史』前編 鹿沼市史編さん室 昭和40年

『宇都宮の遺跡』宇都宮市教育委員会 昭和58年

『嵐山公園遺跡』I-IV 宇都宮市教育委員会 昭和58～61年

『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県教育委員会 昭和59～61年



第2図 周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	時期
1	長崎古墳	集落跡	縄文・奈良・平安
2	梅ヶ内古墳	古墳	後
3	桶の坪遺跡	古墳	後
4	前並集落	集落跡	古墳
5	並ヶ原集落	集落跡	古墳
6	ヤジカ遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
7	主計内遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
8	下砥上愛宕古墳	古墳	後
9	ひのき内遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
10	下砥上古墳	古墳	後
11	下砥上下の内遺跡	集落跡	縄文・古墳
12	西川田遺跡	集落跡	奈良・平安
13	西の内遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
14	辻上遺跡	集落跡	縄文・古墳
15	上欠南遺跡	集落跡	縄文・中
16	上欠網遺跡	集落跡	縄文・中
17	初富土山台遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安
18	高尾神社遺跡	集落跡	縄文・中
19	高尾神社遺跡	集落跡	縄文・中
20	亀岡前古墳	古墳	後
21	亀岡坪古墳	古墳	後
22	定吉掛古墳	古墳	後
23	香掛遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
24	福荷古墳	古墳	後
25	大欠北原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
26	大欠北原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
27	大明神遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
28	大台原古墳	古墳	後
29	高田遺跡	集落跡	縄文・古墳
30	高田遺跡	集落跡	縄文・古墳
31	岩石北南遺跡	集落跡	縄文・後
32	岩石北南遺跡	集落跡	縄文・後
33	谷頭遺跡	集落跡	縄文・中
34	京光地遺跡	集落跡	縄文・中
35	魁の内遺跡	集落跡	縄文・後
36	深津古墳	古墳	後
37	深津古墳	古墳	後
38	工業団地東古墳	古墳	後
39	前橋遺跡	集落跡	縄文・中
40	植内遺跡	集落跡	奈良・古墳・奈良・平安
41	大塚古墳	古墳	後

第1表 周辺の遺跡一覧



- |             |                |             |             |            |
|-------------|----------------|-------------|-------------|------------|
| 1 観音谷古墳跡    | 2 仁保塚遺跡        | 3 宇野宮ゴルフ場遺跡 | 4 泉阿古穴遺跡    | 5 上戸敷北Ⅱ遺跡  |
| 6 瓦塚・白鳥遺跡   | 7 山本遺跡         | 8 大杉寺遺跡     | 9 大光寺遺跡     | 10 新渡遺跡    |
| 11 舞台田岡遺跡   | 12 泉塚天王山遺跡     | 13 上穴遺跡     | 14 谷原遺跡     | 15 丸山遺跡    |
| 16 舞山遺跡     | 17 三軒塚遺跡       | 18 北谷遺跡     | 19 上原遺跡     | 20 上石川大塚遺跡 |
| 21 筑港東側陸内遺跡 | 22 運動広場センター内遺跡 | 23 大塚遺跡     | 24 グループ場内遺跡 | 25 寺畑岡遺跡   |
| 26 グラウンド南遺跡 | 27 安休山遺跡       | 28 台神遺跡     | 29 高地下遺跡    | 30 下野遺跡    |

第3図 周辺の縄文時代前期遺跡分布図

## Ⅱ 調査の経過

### 1 調査に至るまでの経過

宇都宮市岩北山霊園(岩本町)に次ぐ第2霊園造成地の選定作業のなかで、本遺跡内にその具体的な造成計画の意向打診が行われた。その後、可能な限りの遺跡保存を大原則に内部協議が進められたわけであるが、以下はその間の経過である。

昭和55年8月 霊園造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会独自の遺跡分布調査を行い、遺跡保存のための方策を更に検討した。

昭和56年8月 遺跡の開発が確定的になるなかで、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」を定め、現状保存のため方策を更に検討した。

昭和56年11月 宇都宮市教育委員会の直営事業として発掘調査を行うことになり、発掘調査計画策定のための教育委員会独自の最終調査を行った。

昭和56年12月 栃木県教育委員会から遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。

昭和57年2月 文化財保護法57条の3に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

昭和57年3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。

昭和57年4月 発掘調査のための新規職員をむかえ、事務局体制を確立し、詳細実施計画の策定に着手した。文化財保護法98条の2に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。埋蔵文化財発掘調査に係る危険防止対策要綱を定めた。指導委員・指導機関も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により、発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画において、遺跡の広場の設置、現状保存地域の拡大などの成果をもって発掘調査実施へと進んでいった。

### 2 第1～4次調査の概要

#### (1) 第1次(昭和57年度)調査

竪穴住居跡9軒、円墳3基、経塚3基および各種土坑等を調査。

竪穴住居跡は古墳時代後期初頭を中心とするものであり、大部分がカマドを有するものである。出土遺物としては1号住居跡出土の須恵器坏蓋が目玉である。円墳は、川原石小口積の横穴式石室を主体部とする1号墳と木棺直葬とみられる長方形土壇を主体部とする2号墳である。この2号墳の墳丘からは墓前祭に使用したとみられる須恵器と9枚の杯がまとまって出土している。

#### (2) 第2次(昭和58年度)調査

竪穴住居跡13軒、土坑5基、溝数条等を検出。竪穴住居跡は第1次同様古墳時代後期のカマドを有するもので、時期的には後期中葉まで下るものもみられる。また間仕切の痕跡を明確に残す住居





- |              |                |             |            |            |
|--------------|----------------|-------------|------------|------------|
| 1 横石台遺跡      | 2 二良河遺跡        | 3 宇野宮ゴルフ場遺跡 | 4 長岡石代遺跡   | 5 上戸勢北目遺跡  |
| 6 瓦塚・白真遺跡    | 7 山本遺跡         | 8 大谷寺遺跡     | 9 大光寺遺跡    | 10 新徳遺跡    |
| 11 舞台田岡遺跡    | 12 英和天王山遺跡     | 13 上久岡遺跡    | 14 赤塚家遺跡   | 15 丸山遺跡    |
| 16 鎌山遺跡      | 17 三軒塚遺跡       | 18 北台遺跡     | 19 上原遺跡    | 20 上石川大塚遺跡 |
| 21 武蔵野新田地内遺跡 | 22 運動広場センター内遺跡 | 23 大塚家遺跡    | 24 ゴルフ場内遺跡 | 25 寺畑岡遺跡   |
| 26 グランド南遺跡   | 27 友休山遺跡       | 28 白坪遺跡     | 29 岩地下遺跡   | 30 下坪遺跡    |

第3図 周辺の縄文時代前期遺跡分布図

## Ⅱ 調査の経過

### 1 調査に至るまでの経過

宇都宮市菅北山霊園(岩本町)に次ぐ第2霊園造成地の選定作業のなかで、本遺跡内にその具体的な造成計画の意向打診が行われた。その後、可能な限りの遺跡保存を大原則に内部協議が進められたわけであるが、以下はその間の経過である。

- 昭和55年8月 霊園造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会独自の遺跡分布調査を行い、遺跡保存のための方策を更に検討した。
- 昭和56年8月 遺跡の開発が確定的になるなかで、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」を定め、現状保存のため方策を更に検討した。
- 昭和56年11月 宇都宮市教育委員会の直営事業として発掘調査を行うことになり、発掘調査計画策定のための教育委員会独自の最終調査を行った。
- 昭和56年12月 栃木県教育委員会から遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。
- 昭和57年2月 文化財保護法57条の3に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。
- 昭和57年3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。
- 昭和57年4月 発掘調査のための新規職員をむかえ、事務局体制を確立し、詳細実施計画の策定に着手した。文化財保護法98条の2に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。埋蔵文化財発掘調査に係る危険防止対策要綱を定めた。指導委員・指導機関も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により、発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画において、遺跡の広場の設置、現状保存地域の拡大などの成果をもって発掘調査実施へと進んでいった。

### 2 第1～4次調査の概要

#### (1) 第1次(昭和57年度)調査

竪穴住居跡9軒、円墳3基、経塚3基および各種土坑等を調査。

竪穴住居跡は古墳時代後期初頭を中心とするものであり、大部分がカマドを有するものである。出土遺物としては1号住居跡出土の須恵器坏蓋が目に見える。円墳は、川原石小口積の横穴式石室を主体部とする1号墳と木棺直葬とみられる長方形土壇を主体部とする2号墳である。この2号墳の墳丘からは墓前祭に使用したとみられる須恵器と9枚の杯がまとめて出土している。

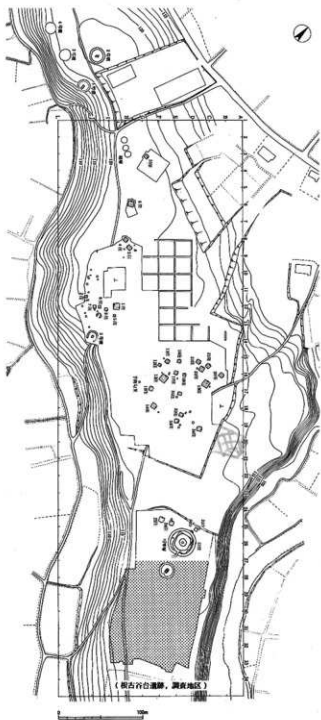
#### (2) 第2次(昭和58年度)調査

竪穴住居跡13軒、土坑5基、溝数条等を検出。竪穴住居跡は第1次同様古墳時代後期のカマドを有するもので、時間的には後期中葉まで下るものもみられる。また間仕切の痕跡を明確に残す住居

況を月をおってまとめていくことにしたい。

昭和61年4月 奈良時代の遺構の検出。前年度あらかじめ確認の意味で入れたトレンチによる標準推構土状況(第5図)および昭和59年度の外周道路建設による発掘調査の経験から、表土から第Ⅱ層までは重機で排土した。この時点でカマドを有した竪穴住居跡の平面プランがぼんやりと現われた。しかし、遺構調査には平面プランがもう一つ不明瞭なものと掘立柱建物跡が相当数あるものとみられたことから、第Ⅲ層の前半まで手掘りで下げて、これらを明確にすることにした。なお、この段階で縄文時代前期の竪穴住居跡の一部とぼんやりではあるが大型の竪穴住居跡の平面プランが現われていた。

昭和61年5月～7月中旬 奈良時代集落跡の調査。竪穴住居跡に関しては軒数が12軒で重複もなかったことから、遺構調査はかなり順調に進んだ。ただ、掘立柱建物跡は17棟と以外に多く、またかなり重複する場所もあったため、建物方向や柱間配置を見極めるのに予想以上の時間を費やした。なお、この奈良時代の集落跡を調査する中で、遺構の覆土中かなりの数の竪穴住居跡が流れ込んでいる状況が認められ、縄文時代前期集落跡の予想外の広がりということが懸念



第4図 根古台遺跡調査地区図

跡も2・3検出されている。なお、遺構外からではあるが、石製の子持勾玉1点とミニチュア土器数点がほぼ同一の地点から出土しており、集落内における祭祀の状況を物語る資料として興味深い。

#### (3) 第3次(昭和59年度)調査

竪穴住居跡11軒、円墳1基(6号墳)、土坑5基等を調査。竪穴住居跡の内訳は縄文時代前期のもの3軒(J-1・2・4号)、古墳時代後期のもの4軒、奈良時代のもの4軒(26-29号)である。6号墳の主体部はかなり破壊を受けていたが、川原石を使用した横穴式石室であることが判明している。また、周溝からは鉄器や土器を伴う土坑が3基検出されており、埋葬行為が周溝内にも行なわれたことが確認されている。なお、縄文時代前期の3軒と奈良時代の4軒の竪穴住居跡は、第5次調査地区の根古谷台遺跡に入るものであるが、外周道路建設のために緊急に調査したものである。

#### (4) 第4次(昭和60年)調査

竪穴住居跡8軒、円墳1基(将軍塚)、土坑・溝等を調査。竪穴住居跡はいずれもカマドを有する古墳時代後期のものである。将軍塚古墳は周溝と墳丘の一部だけの調査ではあったが、出土土器から7世紀代のものであることが判明している。また、竪穴住居跡のうち2軒は将軍塚古墳の周溝に切られており、時期的な位置付けをする上で貴重な資料である。

以上が第1～4次調査の概要であり、この間に調査された遺構数は、古墳時代後期の竪穴住居跡34軒、円墳5基、経塚3基そして根古谷台遺跡に含まれる縄文時代前期の竪穴住居跡3軒と奈良時代の竪穴住居跡4軒ということになる。

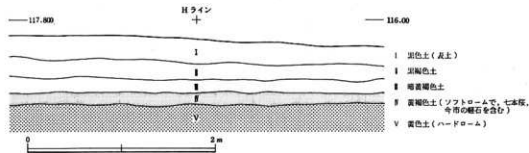
### 3 第5次(根古谷台遺跡)調査の経過と概要

#### (1) 調査地区

本次の調査は当初に設定した発掘5か年計画の最終第5次にあたるものであり、聖山公園造成予定地の最終地区を対象としたものである。位置的には第3次で調査した6号墳の南側約9500㎡(第4図)であり、調査前の状況は北側約3/4が雑木林、南側約3/4が植林された杉林であった。なお、前記したように、この地区の東側約1000㎡は、昭和59年度に外周道路建設のための緊急調査をすでに実施している。従って、今回の実際の調査対象面積は、この約1000㎡を差し引いた約8500㎡ということになる。

#### (2) 調査経過

この地区に関しては、外周道路建設に伴う調査により縄文時代前期と奈良時代の集落跡が中心であることがわかっていった。縄文時代前期の集落跡については、近隣で調査されている状況などから、せいぜい5～6軒の竪穴住居跡群で終息するものという予想があった。問題は奈良時代の集落跡であるが、これにしても重複がみられないことから、以外にすっきりした形で現われるものと推測した。従って、1年間で8500㎡という調査面積は決して無理な数字ではないというのが調査前の予想であった。しかし、実際に調査に入ってみると、縄文時代前期の大集落跡にあたるということが徐々に明らかになり、最終的には約1年間調査を延期する結果となった。以下、この間の調査状



第5図 標準土層図

された。

昭和61年7月下旬～8月 縄文時代前期の遺構の検出。奈良時代の集落跡の調査がほぼ完了するのと前後して、縄文前期の遺構確認作業に入った。当初、遺構のありそうな場所を中心に整地作業を続けたが、平面プランを明確にすることはできず、検出面を全体にもう少し下げることが出てきた。この場合、奈良時代の遺構の覆土内に流れ込んでいた相当数の礫が、あるいは下層で平面的におさえられるのではないかとということが、一つの拠り所であった。結局、全体を第Ⅲ層の下面から第Ⅳ層の上面まで下げたところで、竪穴住居跡や各種土坑の平面プランがいくらか明瞭になり、礫も部分的にはある程度広がりをもち現われた。なお、この段階で縄文前期の集落跡が調査地区全体に広がるのが明らかとなり、竪穴住居跡だけでも20軒はこえることが確実となった。従って、この時点で当初予定していた昭和61年内発掘終了という線は無理となり、とりあえず年度内（昭和62年3月）まで延期することに決定した。

昭和61年9月～10月 竪穴住居跡の調査。平面プランの確認が最も早かった大型の竪穴住居跡（J-5号）から調査を開始した。当初、2～3軒が重複しているものとみられたが、ある程度調査が進んだ段階で1軒の超大型の竪穴であることが判明した。しかし、床面からはかなりの建替えを物語るように大小300本以上の柱穴が現われ、この組合せを見極めるために掘りあぐねる状態がしばらく続いた。結局、すべての穴を半載し、土層のデータをとることにした。なお、この間併行して数軒の竪穴住居跡を調査したが、いずれも大なり小なり建替えがみられ、一軒掘り上げるのに必要な時間の計算が立たないことを痛感した。

昭和61年11月～12月 長方形大型建物跡の検出。竪穴住居跡以外に土坑が相当数みられることはある程度わかっていて、調査の手順としてはまず竪穴住居跡を先に片付けようと考えていた。そこで、J-5号住居跡が一段落した後、主力を1軒となりの比較的大型の竪穴住居跡（J-11号）の調査にそそいだ。ところが、このJ-11号の覆土の中層ぐらまで下げた段階で、やや大きめの柱穴状の平面プランがいくつか現われた。最初、J-11号の柱穴跡かと考えたが、竪穴の平面プランとの並びがしっくりこないこと、さらにどうしても検出面が早すぎるという点が気になった。あるいは周囲で確認されている土坑と関連するのではないかとことから、そこでJ-11号の調査

を一段中止し、周辺の整地作業に努めた。

その結果、徐々にではあるが、土坑どうしに一定のつながりがあるらしいことが見えてきた。しかし、それほどの数ではないと思っていた土坑がかなりの数でしかも広範囲にわたっている状況が現われ、逆にまとまりのつかない状況に陥った。このことにあまり時間を費やし過ぎてはということから、一定のつながりをもつ土坑に切られているという判断のもとに、J-11号の調査を再開した。結

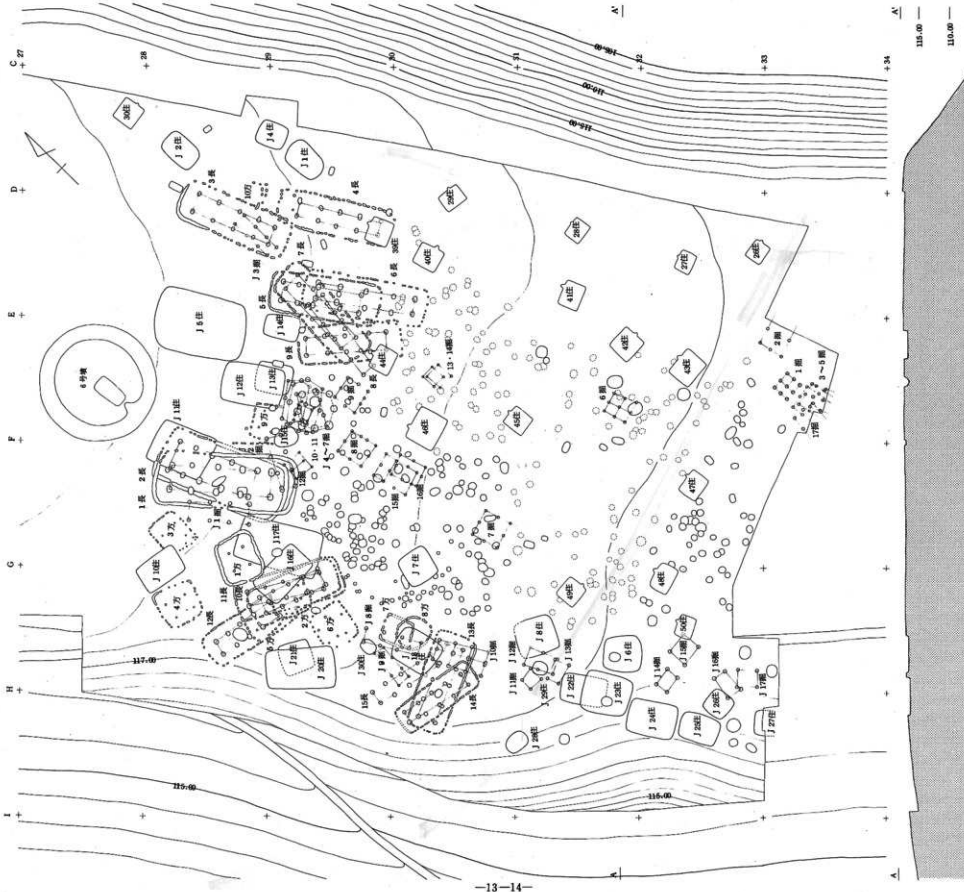


1・2号長方形大型建物跡の調査風景

果的にはこのことが功を奏し、床面近くまで下げた段階で、土坑群を取り囲むような細い溝状の遺構が、覆土を切って存在していたことに気付いた。再び周辺にもどり、この溝状遺構の検出に努めた。そして、この溝状遺構が思いがけない大きさの長方形を区画していることが確認できると、それまで混濁していた土坑群のうちいくつかがこの長軸に沿って2列に並んでいる様子が見えてきた。これが1号長方形大型建物跡検出のきっかけであり、集落跡の遺構と言えまづ竪穴住居跡と土坑という単純な発想を捨てざるを得なくなった。

昭和62年1月中旬～3月 縄文時代前期集落跡の検出。新しい遺構の認識に時間がかかったこともあり、調査は思うようにはかどらず、すでにこの時点で来年度(昭和62年)6月まで延長することを決定した。しかし、それにもまして、長方形大型建物跡の確認を契機としての平面における遺構認定作業の重要性が生じ、再度、遺構検出のための整地作業を全面に実施することにした。この結果、竪穴住居跡群に重なるような状態で、かなりの数の長方形大型建物跡あるいは孤立柱状の建物跡らしきものが存在していることが判明した。また、これらの住居・建物跡群が広場を囲むような状態で配置している姿も徐々に明瞭となり、この段階で縄文時代前期の極めて大規模かつ特色ある集落跡にあたったことが間違いないものとなった。

昭和62年4月～6月 住居・建物群の調査。正直なところ、これまでの遺構の調査は行きあたりばったりで、取りあえずはつきりしている所から、掘り易そうな所からというものであった。しかし、このことが遺構の切り合いを見間違えたり、新しい遺構を認識できなかったりという事態を招き、結果的に必要以上の時間を費やしてしまうことになっていた。そこで、広場とそれを囲む住居・建物群という集落構成のおおよそがみえてきた時点で、まず外側の住居・建物群を端から順に片付け、そして最後に広場に入るという調査の基本方針を定めた。なお、この間、長方形大型建物跡がかなり複雑に重複することや、孤立柱建物跡・方形建物跡という新たな遺構の認識もあり、住居・建物群の約分を終了させるのが限界であった。従ってこの時点で、年内内ということを目指して三たび調査を延長することとなった。



圖例

廟宇時代	J1 莊 J-1 型廟宇建築	2.5 棟
傳統式廟宇	J1 莊 J-1 型廟宇建築	20 棟
現代式廟宇	J1 莊 J-1 型廟宇建築	30 棟
碑亭	J1 莊 J-1 型碑亭	1 棟
柱廊	J1 莊 J-1 型柱廊	1 棟
圍牆	J1 莊 J-1 型圍牆	1 處
水溝	J1 莊 J-1 型水溝	1 處

第 6 圖 紀念堂各主要建築配置圖

昭和62年7月～8月 引き続き住居・建物群の調査。この段階になると、常に性格不明の穴や溝がいくつかあるものの、竪穴住居跡プラス3種類の建物跡という構成がやや鮮明となり、比較的順調に調査は進んだ。ところで、これだけの遺構が存在する割には、遺物が非常に貧弱であるという印象が強かった。そこで、西側の緩斜面に捨て場があるのではないかとということから、トレンチを入れたが、結局この範囲内にはそれらしきものがないということが明らかになった。

昭和62年9月 墓塚の調査。外側の住居・建物群の調査が終了するのと同後して広場側にある土坑の調査を開始した。春に再度遺構の確認作業を実施した段階で、広場側全体にかなりの土坑が存在することを確かめていた。従って、取りあえず住居・建物群に近い所から中心部に向かって調査を進めようということで、まず北東部の一角に入った。ところで、住居・建物群からは結局極立った遺物の出土



指導委員会課風景（墓塚群付近にて）

はみられなかった。また、広場側でも確群にまじって通常の磨石や石皿などがみられるだけのようであった。結局、多くの土坑をまだ残してはいるものの、遺物として本集落跡を特色付けるようなものは出土しないのではないかとという予測が強かった。ところが、この土坑群の調査に入った途端、玦状耳飾や極めてめずらしいという玉類の出土をみた。また、他に副葬されたような石匙や石鏃を出土する土坑もいくつかみられ、広場内の土坑の多くが墓塚である可能性が強まった。なお、この発見と相前後して本集落跡の保存という方向が固まりつつあった。

昭和62年10～11月 広場の調査。この段階で保存が確定的となった。ただ、ここで広場内に残る多数の土坑をどう処理するかということが問題となった。まず、大部分が墓塚であるとするとなりに調査も慎重にならざるを得ず、かなりの期間延長が必要となること。また、保存ということからすれば掘らずに残すというのがある意味では最善であること。しかし、一方ではずべて掘らなければ一定の性格付けはできないということもある。結局、いろいろ協議を重ねた結果、方法としてはこれらの中間をとった。つまり、広場を十文字に分割した区に含まれる土坑を調査し、他は平面プランを図面におとすだけにとどめた。

昭和62年12月 保存のための埋め戻し。遺構内には鹿沼土を埋め、その上に黒土を戻した。

### (3) 検出遺構数

根古谷合遺跡で検出された遺構の数は、昭和59年外周道路分も含めると次のとおりである。

- 縄文時代前期；竪穴住居跡27軒、長方形大型建物跡15棟、方形建物跡10棟、掘立柱建物跡17棟、土坑（墓塚も含めて）339基で内144基は未発掘。
- 奈良時代；竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡17棟、円形有段土坑1基。
- その他、時期不明の土坑、ピット、溝等がある。





※長方形大型建物跡と方形建物跡の両者は  
 遺構図法を明確にするために、すべて露  
 状に表現した。

- J1在 J-1号型穴住居跡
- J1集 J-1号型立柱建物跡
- 1長 1号長方形大型建物跡
- 1万 1号方形建物跡

第7図 根古谷台遺跡縄文時代前期遺構配置図

### Ⅲ 検出された遺構と遺物

ここでは根古谷台遺跡で検出された遺構・遺物のうち、特に縄文時代前期集落跡に係わるものを取り上げ、それらの概要を報告する。ただし、遺物の細かい整理・分析はまだ行っていない。従って、今回は遺構についての所見を中心に記述し、遺物については代表的なものを写真で提示したり、全体的な様相について簡単に触れたりするだけにどめたい。なお、各遺構の概要に入る前に、集落跡の規模と景観および遺構の名称について触れておきたい。

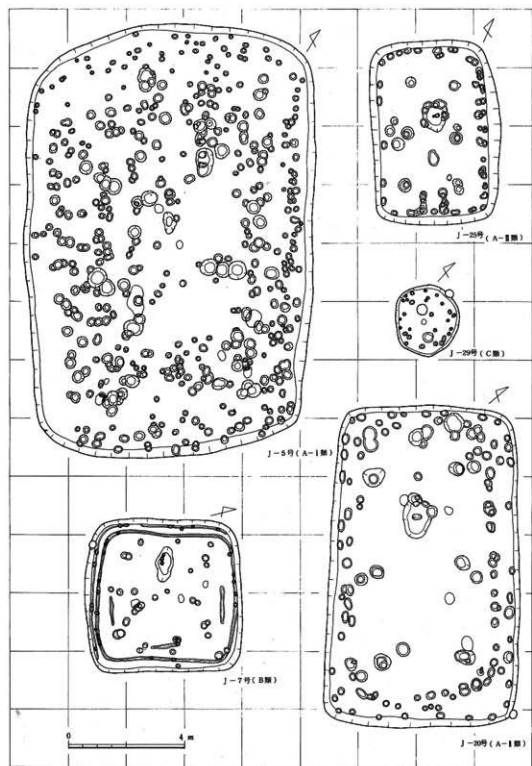
**集落跡の規模と景観** 根古谷台遺跡の遺構のうち縄文時代前期関係のものを抜き出したものが第7図である。住居・建物跡群が広場・土坑群(墓域群)を取り囲む形で配されている状況が明瞭に出ている。集落跡はさらに南方の調査地区外に延びる様相を示しているわけであるが、東側がすぐに急斜面になっていることを考えると、おそらく住居・建物跡群は西側の緩斜面沿いをぎりぎりまで半円形に近い弧状を呈してくるものとみられる。仮に、このようなことから規模を想定すると、集落全体は南北約150m、東西約90m、また内側の広場部分は南北・東西とも60m前後というかなり大きなものであることになる。

**遺構の名称** 前節の調査経過の中で記したとおり、本集落跡では竪穴住居跡以外に3種類の建物跡すなわち長方形大型建物跡、方形建物跡、竪柱建物跡の存在を認定した。それぞれの細かな属性については、以下代表的なものを提示しながら説明して行くわけであるが、これらを分類した大きな理由は一定の検出面で現われる遺構的な形態差ということである。従ってこれらの名称については主に遺構の形状的な特徴を重視して付したものであり、機能差を考慮に入れたものではない。これは逆に、竪穴のものに関しては他の建物跡に対して例外なく明瞭な炉跡を有するということからこれまでの慣習に従って住居跡としたが、決して機能的に他の建物跡と区別する名称ということではない。強調したいのは、竪穴住居も含めて形状の異なる4種類の建物が一つの集落を形成していたとみられることであり、今後の類例の増加や研究の進展いかんでは、今回の名称にこだわるというものではない。

#### 1 竪穴住居跡

##### (1) 遺構

ここで竪穴住居跡として分類した遺構は、検出面より一定の深さの壁をもつこと、ある程度踏み固められた床面を有すること、屋内に炉跡を有していることなどで他の建物跡から区別できるものである。しかし、検出された27軒の竪穴住居跡は、これらの共通した要素をもつ一方で、平面形や内部的部分的な構造など何点かに差異がみられる。とりわけ、規模の大小は明瞭であり、本集落跡の大きな特徴の一つと言える。そこで、ここでは特に平面形と規模という観点から5分類し、それぞれの特性をまとめることにしたい。なお第2表に示したとおり、大部分の竪穴住居跡は1ないし



第 8 图 整穴住居跡平面图

住所番号	平面形	長軸方位	規模 m (長軸×短軸)	壁高cm	主柱穴	築 地石	礎 石	礎 溝	礎柱穴	その他	
J-1号	隅丸長方形	N-1°-W	6.7×4.4	20-30	6本2組⑦	1	2			礎替1回以上。	
J-2号	"	N-3°-W	6.15×4.1	18-20	6本1組		1				
J-4号	隅丸四角形	N-18°-W	4.75×4.2	25-30	4本2組	1	1			礎替1回。	
J-5号	隅丸長方形	N-29°-W	15.2×9.9	28-32	6本4組⑦	6	3		3-4重	礎替3回以上。	
J-6号	隅丸方形	N-43°-W	6.1×6.0	35-45	6本3組	2	1	本	有	礎替2回。	
J-7号	"	N-73°-W	5.4×5.3	30-37	6本3組	3	1	3	本	礎替2回。	
J-8号	"	N-61°-W	6.55×6.25	32-35	6本2組	2	1	本		礎替1回。	
J-10号	隅丸長方形	N-78°-W	7.1×4.7	12-29	6本2-3組	1			有	礎替1-2回。	
J-11号	"	N-19°-W	9.6×7.1	18-26	6本3組	5	1			礎替2回。	
J-12号	"	N-28°-W	10.1×6.6	26-30	6本3組	5	1		2重	礎替2回。	
J-13号	"	N-30°-W	5.65×4.95	10-15	6本1組以上	1		1	本	有	礎替1回?
J-14号	"	N-30°-W	5.7×4.1	10-15	6本1組以上	3					礎替1回?
J-15号	不整形円形	N-56°-W	3.8×2.7	8-10	無し	1			有		
J-16号	隅丸長方形	N-85°-W	9.2×5.4	20-25	6本2組	4	1	一部	2重	礎替1回。	
J-17号	"	N-28°-W	13.5×7.5	4-8	6本1組	9	1		有		
J-18号	"	N-17°-W	7.3×5.9	5-8	6本2組以上	3			2重	礎替1回以上。	
J-20号	"	N-45°-W	11.1×6.7	23-33	6本2組	3	1		2重	礎替1回。	
J-21号	隅丸方形	N-60°-W	(5.2)×5.0	18-20	4本1組	1				有	
J-22号	隅丸長方形	N-32°-W	(7.0)×4.6	25-30	6本1組以上	1			有	礎替1回?	
J-23号	"	N-31°-W	7.7×6.7	20-42	6本3組以上	9	1	3-5本	有	礎替3回以上。	
J-24号	"	N-30°-W	7.85×5.7	24-46	6本3組以上	2	1	1	本	3重	礎替3回以上。
J-25号	"	N-28°-W	6.35×4.45	21-50	6本1組	1	1		2重	礎替1回?	
J-26号	隅丸方形	N-88°-W	4.25×4.1	22-25	4本1組以上	2			有	礎替1回?	
J-27号	不明	N-42°-W	4.1×?	8-12	不明	1		一部	有	礎替1回?	
J-28号	不整形円形	N-83°-W	3.75×2.8	3-6	4本1組⑦	3			有		
J-29号	楕円形	N-30°-W	2.45×2.25	11-13	無し	1			有		
J-30号	"	N-4°-W	2.6×2.05	4-6	無し	1			有		

※ 伊の羅の地は地床石、石は1-2層の石が置かれていたものである。また、壁高はすべて検出面からの高さである。

第2表 竪穴住居跡一覧

2回の建替えを行っている。従って、ここで扱う平面形および計測値はその堅穴が最も広がった段階（大部分は廃絶直前の最終段階）のものとする。

A類は平面形が隅丸長方形のもので、規模から大きく次の3つに分かれる。

A-I類 長軸が13m以上の大型のもので、J-5号とJ-17号住居跡の2軒がある。このうちJ-5号は長軸15.2mと最大であり、150㎡近い床面積をもつ。主柱穴は、J-5号がまだ検出を残すものの基本的には6本とみられ、壁柱穴をもつ。また、建替えのことを考慮しても検出される炉跡の数は多く、一時期に数か所で使用していたものとみられる。

A-II類 長軸が9-12mのやや大型のもので、J-11号・J-12号・J-16号・J-20号住居跡の4軒がある。主柱穴はすべて6本であり、ほとんどが壁柱穴をもつ。また、A-I類同様炉跡の検出数は多く、一時期に2-3か所で使用していたものとみられる。

A-III類 長軸が8m未満のもので、J-1号・J-2号・J-10号・J-13号・J-14号・J-18号・J-22号・J-23号・J-24号・J-25号の10軒があり、長軸5.65mのJ-13号が最も小さい。主柱穴はすべて6本であり、大部分が壁柱穴または壁溝をもつ。A-I・II類に比較すると炉跡の検出数は全体に少なく、一時期にすれば例外はあるもののほぼ一か所で使用していたものとみられる。

B類 平面形がほぼ隅丸方形のものであり、J-4号・J-6号・J-7号・J-8号・J-21号・J-26号住居跡の6軒がある。規模にはいくらかのばらつきがあるが、長軸4-7mにおさまりA類のように特に大型のものを分類することはできない。主柱穴は6本のもの4本ものが約半数で、壁溝または壁柱穴をもつ。炉は一時期にはば一か所とみられる。

C類 平面形が楕円または不整形のものであり、J-15号・J-28号・J-29号・J-30号住居跡の4軒がある。規模は長軸2-4mと非常に小さく、A-IIIおよびB類によばない。主柱穴は4本の可能性があるJ-28号を除き認めることができないが、いずれも壁柱穴はもっている。また、ほとんどが建替えの痕跡は認められず、炉跡はJ-28号を除き一か所である。

なお、これらの集落内での配置をみると、A-I・II類が北半部に片寄っていることが、一つの傾向として指摘できる。

## (2) 遺物

堅穴住居跡からの出土遺物は、土器・石器および炭化した堅果類である。土器の大部分は埋没過程で捨てられたとみられる破片であり、完形品あるいはそれに近いものは床面上はおろか覆土中からも出土していない。土器片の大部分は黒浜式であるが、文様構成や組合せから数時期に分類できる内容をもつものとみられる。石器は、敲石類(敲石、磨石、凹石等)が最も多く、ついで石皿、石匙、石鏃、スクレイバーさらには不定形である台が使用したようなものがみられる。ただし、石斧類は破片も出土していない。堅果類の出土は7-8割の堅穴住居跡で確認しており、クルミ、クリが中心である。また、その出土位置は覆土中全体におよぶ場合が多いが、やはり炉跡の周辺には集中する傾向がある。

## 2 長方形大型建物跡

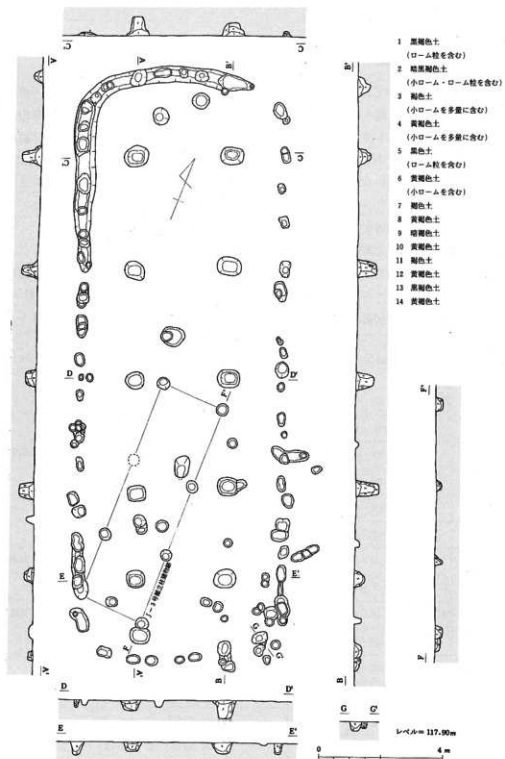
一定の検出面において2列の柱穴列とそれを取り囲む溝または小ピット列が確認できる遺構であり、壁の立ち上がり、踏み固められた床面さらには炉跡等が検出されないことで、本遺跡内の竪穴住居跡とは区別できるものである。また、検出状況においては後記する方形建物跡、掘立柱建物跡に共通する部分が多いわけであるが、規模的にいずれもずばぬけて大きいこと、隅丸長方形で2列の柱穴列が配されるという安定した規格を有していることから、明確に分類できるものである。なお、遺物の出土は極めて少なく、柱穴や溝内に若干の土器片が入るくらいなわけであるが、それらの大部分は胎土中に繊維を含むものである。

以下、15棟検出された本建物跡の特徴を整理すると次のようになる。

**平面形と規模** 平面形はいずれも隅丸長方形で、その規模は最大の2号が長軸23.8m、短軸9.95mであり、最小の14号でも長軸14.4m、短軸5.1mという大きさである。これは単純に比較すれば、すべてが本遺跡竪穴住居跡のA-I類以上ということであり、いかに大規模なものであるかがわか

建物跡名	平面形	長軸方位	規模m (長軸×短軸)	主 柱 穴			周囲の状況
				配 列	平面規模(長軸×短軸)cm	深さcm	
1号	隅丸長方形	N-35°-W	23.1×9.8	2列10本	105-130×75-90	48-62	溝の中に小ピットが並ぶ。
2号	〃	N-21°-W	23.8×9.95	〃	98-130×68-95	31-50	〃
3号	〃	N-20°-W	19.2×6.95	〃	67-78×49-60	28-62	小ピット列。一部溝。
4号	〃	N-24°-W	(18.8)×6.45	(2列10本?)	58-85×42-60	33-56	〃
5号	〃	N-28°-W	17.9×7.0	2列10本	75-95×65-90	18-60	〃
6号	〃	N-27°-W	20.2×6.8	〃	88-108×65-85	19-50	小ピット列。
7号	〃	N-2°-E	18.5×6.3	〃	50-60×45-55	28-48	小ピット列。一部溝。
8号	不明	N-ア-E	(14.5×2.6)	(2列10本)	60-70×50-70	20-34	不明
9号	隅丸長方形	N-46°-W	16.9×6.3	2列10本	60-82×54-68	21-68	小ピット列。一部溝。
10号	〃	N-67°-W	15.15×(6.4)	〃	55-80×46-69	24-42	〃
11号	〃	N-56°-W	17.6×(6.4)	〃	65-78×55-63	28-50	〃
12号	〃	N-73°-W	(15.5)×6.2	〃	66-88×60-70	31-60	〃
13号	〃	N-68°-E	16.4×6.7	〃	58-74×48-62	8-47	〃
14号	〃	N-76°-W	14.4×5.1	〃	50-68×45-60	18-40	〃
15号	不明	N-76°-W	(10.9×2.2)	〃	55-60×50-55	20-35	不明

第3表 長方形大型建物跡一覧



第9図 3号長方形大型建物跡実測図

る。なお、8号と15号は周囲の状況が不明瞭であったものであるが、規模および主柱穴の配列等から、本建物跡とみて間違いないと考えたものである。

**主柱穴と周囲の状況** まず、主柱穴の配列は、何例か確認できないものがあるものの、すべて2列で10本とみてよいようである。主柱穴の掘り方は平面形が隅丸長方形もしくは楕円形になるものが多く、その規模は1・2号など1mをこえているものもみられる。また、検出面からの深さは50cm前後のものが多いわけであるが、20cmにみえない浅いものが相当数みられる。これは本遺跡の竪穴住居跡の主柱穴が平均して70~80cmのしっかりした深さをもっていることと比較すると、やや不自然なことと思える。次に周囲は溝状もしくは小ピット列として検出されるわけであるが、溝状の場合も実際に掘り下げてみると浅い溝の底面に小ピットが並ぶという状況である。これら周囲の小ピットは全体に浅いものが多く、検出面からの深さはしっかりしたものでせいぜい20~30cmである。また、全体的には一列に並び隅丸長方形を成しているものの、個々の間隔は一定していない。

**配置** 1・2号あるいは5~9号というように2棟から数棟が重複して検出される場合がほとんどである。これは遺構配置図をみても明瞭に表われているとおり、ある程度限定された特定の場所内で建替えを繰り返したと理解できる状況である。また、集落内での配置をみると北側にあるものがほぼ南北に長軸をとっているのに対し、西側に行くに従って長軸を東西方向に傾けている。これは、大きくみると広場の中心に向かって長軸を設定したかのような状況である。なお、本建物跡は北側から西側の半ばまで続いて在るもの、南部へ行くくと検出されない。

**炉の有無** 15棟のうち炉跡が検出されたものは一棟もないわけであるが、はたしてもともと無いものかどうかということを断言することはできない。少なくとも、前節調査経過の中で記したとおりの調査手続きを踏んだ範囲においては検出できなかったということである。ただし、ほぼ同一の検出面における広場内で、屋外炉の痕跡とみられる燃土を3か所確認している。このような状況から考えると、仮に本建物跡に炉があったとしても、それは竪穴住居跡のような掘り込みを持つものではなく、しかも長期間使用するようなものではなかったということであろう。

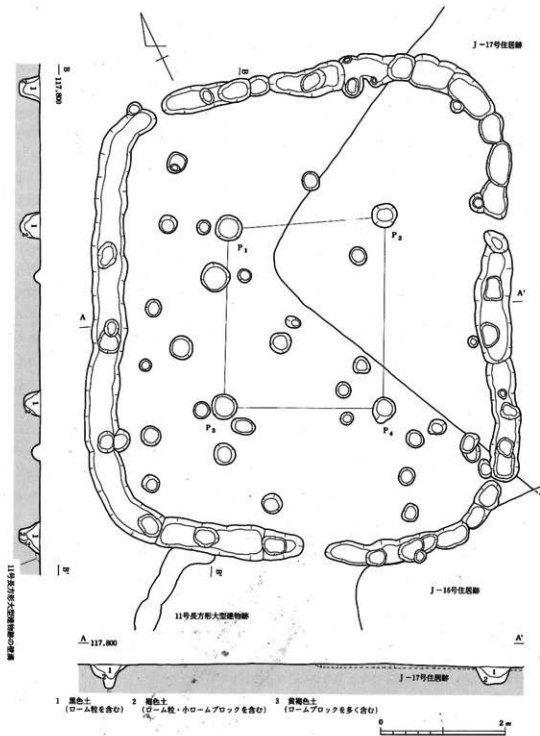
### 3 方形建物跡

ほぼ方形にめぐる溝または小ピット列の内側に柱穴が配されるものであり、検出の状況および遺物の出土状況等は長方形大型建物跡に極めて近い遺構である。以下、特徴を整理する。

**平面形と規模** 基本的には隅丸方形であるが、台形状になったり、畚だりしているものが目立つ。また、規模は長軸で5~8mほどの範囲であり、本遺跡の竪穴住居跡と比較すればA~ⅢまたはB類の大きさに近く、特に大型と言えるものはみられない。

**主柱穴と周囲の状況** 主柱穴は1号および4号で4本であることを確認している。他も大部分4本とみられるが、そろって検出できない場合が多い。さらに、検出されたものでも深さは14~5cmから30~40cmと全体に浅い。また、周囲の状況は長方形大型建物跡とほぼ同様で、溝状または小ピット列になる。ただし、図示した1号(第10図)からもわかるように、むしろ周囲のピットの方が主柱





第10図 1号方形建物跡実測図

建物跡名	平面形	長軸方位	規模 m (長軸×短軸)	主柱穴		周囲の状況
				本数	深さcm	
1号	隅丸方形	N-29°-E	8.15×7.0	4	26-32	溝の中に小ピットが並ぶ。
2号	隅丸方形?	N-28°-E	6.6×?	(4)	26-40	小ピット列。
3号	隅丸方形	N-3°-E	6.65×5.45	(4)	12-30	小ピット列。
4号	〃	N-14°-E	6.75×6.7	4	10-26	小ピット列。一部溝。
5号	隅丸方形?	N-15°-E	(6.6)×?	?		小ピット列。
6号	隅丸方形	N-12°-E	6.65×6.2	(4)	12-40	小ピット列。
7号	〃	N-17°-W	5.1×4.8	(4)	15-30	小ピットと溝。
8号	(楕円形)	N-88°-W	5.7×5.3	?		小ピットと溝。
9号	隅丸方形?	N-55°-E	6.1×(5.0)	(4)	16-38	小ピット列。
10号	〃	N-30°-W	?×(4.5)	?		小ピット列。一部溝。

※ 主柱穴の本数で(4)としているのは、確定であり、実際には3本あるいは2本しか確認されていない。

第4表 方形建物跡一覧

穴より深めになるのが本建物跡の特徴のようであり、この点は長方形大型建物跡と様相を異にしている。

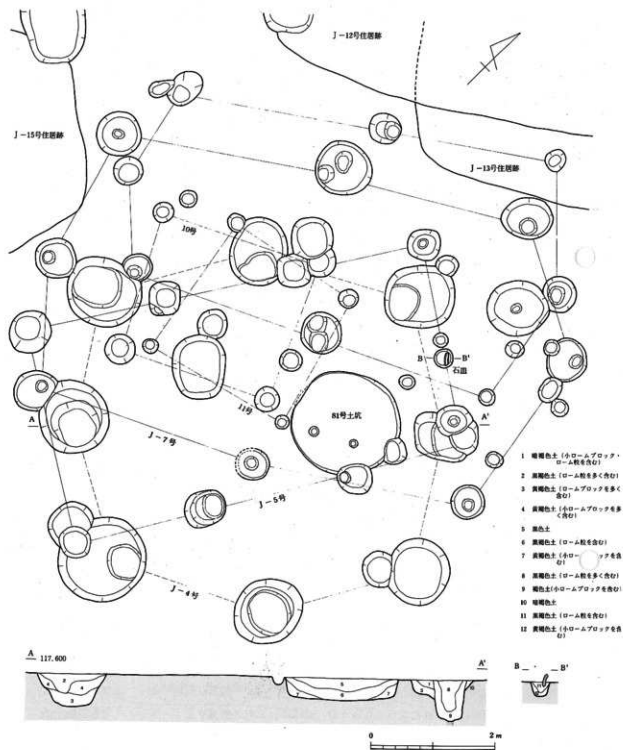
**配置** 北西部にやや集中する傾向はあるものの、長方形大型建物跡の配置に近い状況がみられ、やはり西側の南部へ行くと検出されなくなる。

**炉の有無** 10棟のうち炉跡の検出されたものは一棟もなく、遺構の類似性から長方形大型建物跡と同様な状況が想定できる。

#### 4 掘立柱建物跡

主柱穴の配列だけで長方形大型建物跡や方形建物跡のような周囲を取り囲む状況を示す遺構が検出されないものを一括して掘立柱建物跡とした。以下、特徴を整理する。

**形態と規模** 形態は3間×2間、3間×1間、2間×2間、2間×1間、1間×1間の5種類に分かれる。ただし、2間×2間と考えたJ-4号(第11図)はやや特異な形態であり、かなり大きめの8本の柱穴が円形に配されたようにも見える。さらに、これと重複するJ-6号・7号も長軸上の柱が外に張り出す形をとっている。また、3間×2間としたJ-10号は総柱であり、しかも中軸上の4本の柱穴が両側のものより深いという特徴をもっている。規模はこれらの形態差とかわり、長軸2m代から9m代とかなりの幅がみられる。



- 1 焼物土 (全ロームアロップ、ロームを多量)
- 2 炭物土 (ローム粒を多く含む)
- 3 炭物土 (全ロームアロップを多く含む)
- 4 炭物土 (全ロームアロップを多く含む)
- 5 炭物土
- 6 炭物土 (ローム粒を多量含む)
- 7 炭物土 (全ロームアロップを多量含む)
- 8 炭物土 (ローム粒を多く含む)
- 9 焼物土 (全ロームアロップを多量含む)
- 10 焼物土
- 11 炭物土 (ローム粒を多量含む)
- 12 炭物土 (全ロームアロップを多量含む)

第11図 J-4-7号掘立柱建物跡実測図

建物跡名	形態・柱間 (長辺×短辺)	長軸方位	規模 m (長軸×短軸)	柱 穴 m		そ の 他
				平面直径	深 さ	
J-1号	3×1	N-38°-W	9.25×3.1	45-60	75-92	
J-2号	3×1	N-28°-E	8.7×2.45	50-60	64-96	
J-3号	3×1	N-1°-E	7.25×2.1	35-40	20-25	
J-4号	(2×2)	N-48°-E	5.95×5.7	90-140	24-54	柱穴配列は円形に近い。
J-5号	3×1	N-33°-E	6.5×3.4	55-65	44-66	
J-6号	2×2	N-57°-E	7.15×3.5	45-65	28-61	長軸上の柱は外に張り出す。
J-7号	2×2	N-57°-E	8.4×4.8	40-90	11-49	*
J-8号	3×1	N-29°-W	8.95×2.3	50-60	43-66	
J-9号	3×1	N-9°-E	6.3×2.0	25-40	20-50	
J-10号	3×2	N-26°-W	8.15×3.95	55-70	22-59	総柱で、中軸の柱穴4本は深い。
J-11号	2×1	N-24°-W	5.0×2.6	40-50	56-95	柱穴配置はやや台形。
J-12号	1×1	N-87°-W	2.3×2.2	38-50	17-43	*
J-13号	1×1	N-71°-E	3.4×2.2	40-50	28-68	*
J-14号	1×1	N-84°-E	3.0×2.2	65-70	40-48	
J-15号	1×1	N-84°-E	3.65×3.15	58-66	90-99	
J-16号	1×1	N-10°-E	3.8×2.3	53-67	41-86	柱穴配置はやや台形。
J-17号	1×1	N-41°-W	3.3×2.8	40-63	44-58	

第5表 竪立柱建物跡一覧

柱穴 掘り方の平面形は一般に円形もしくは隅丸方形ということで長方形大型建物跡のそれとはやや異なり、深さのしっかりとしたものが多い点では方形建物跡のそれと大いに異なっている。ただし、1m以上の径があり、せいぜい50cm前後の深さしかないJ-4号の柱穴は例外である。

配置 3間×2間、3間×1間等の大型のものは長方形大型建物跡の配置に近く、西側の南部へ行くと1間×1間の小型のものが主体となっている。また、J-2号・J-8号・J-10号等長軸が広場の中心に向って直交するような設定をとるものとみられ、長方形大型建物跡の場合とは様相を異にしている。なお、形態的にやや特異なJ-4号・J-6号・J-7号は、J-5号も含めてほぼ一か所に重複しており、限定された場所で建替えを繰り返したとみられる長方形大型建物跡と共通した雰囲気をもっている。

伊の有無 17棟のうち伊跡の検出されたものは一棟もない。

## 5 墓墳

広場部分からは320基余りの土抗が検出されたが、前節調査経過の中で記したとおり、調査したのはこのうちの179基であり、他は確認した状態のまま掘らずに埋め戻した。これらの中には後に述べるように明らかに墓墳であることを示す遺物を出土したものがみられる。もちろん広場内にあるものすべてが墓墳であるかどうかは断言できないが、積極的に墓墳は無いことを物語る資料もみられず、ここでは取りあえず大部分が墓墳であるという前提で説明をして行くことにしたい。なお、これらのうちの何例かは土壌の化学分析を行う予定である。

### (1) 分布の状況

ほぼ広場部分全体に分布するが(第7図参照)、密度からみると住居・建物跡群寄りが濃く、より内側に行くに従って薄くなる傾向がみられる。また、部分的には、5～6基から10基程度の墓墳が空間地を囲んで環状あるいは弧状に並ぶ状況がみられる。そして、単に密集したような部分も、このようなものが重なり、接触したりした状態と理解できないこともなく、埋葬における一定の法則が存在したことを窺わせる。

### (2) 広場北西隅の墓墳群

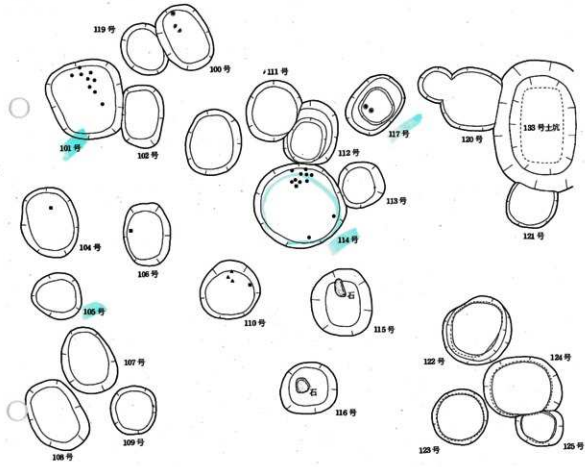
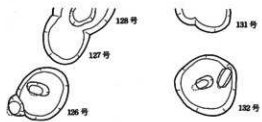
調査した179基の墓墳のうち遺物の出土があったのは8基だけであり、しかもすべて広場の北西

番号	平面形	規模cm (長×短)	深さ cm	その他	番号	平面形	規模cm (長×短)	深さ cm	その他
100号	楕円形	110×80	53		115号	楕円形	110×96	46	
101号	真丸形	126×121	50		116号	＝	93×83	39	
102号	楕円形	110×67	59		117号	＝	102×76	38	二段掘り込み。
103号	＝	105×91	55		118号	円形	135×122	38	中央部にコート状の掘り込み。
104号	＝	115×91	53		119号	楕円形	86×64	22	
105号	円形	80×75	28		120号	＝	(115)×102	12	
106号	楕円形	102×76	61		121号	＝	(90)×80	10	
107号	＝	110×86	37		122号	＝	116×108	72	わずかに変状。
108号	＝	119×87	55		123号	円形	90×88	103	＝
109号	＝	78×72	21		124号	楕円形	126×96	96	＝
110号	円形	97×94	57		125号	＝	80×(85)	71	＝
111号	楕円形	98×90	36		126号	＝	90×77	27	底面に小ピット。
112号	＝	103×86	51	二段掘り込み。	127号	＝	(85)×75	21	
113号	円形	77×74	49		128号	＝	(100)×(85)	24	二段掘り込み。
114号	＝	143×137	54		132号	円形	100×95	19	底面に小ピット。

※ 平面形および規模は検出箇での観察による。また、深さも検出箇所から計測したものである。なお、133号は新しい時期の土抗とみられる。

第6表 墓墳一覧

10号長方形大型竪穴の平面図  
11号長方形大型竪穴の平面図



- 瓦
- 鉄釘跡
- 石配
- 石礎

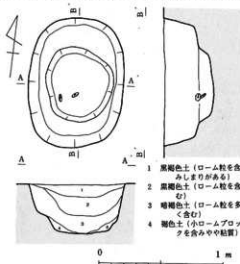


第12図 広場北西隅の竪穴群

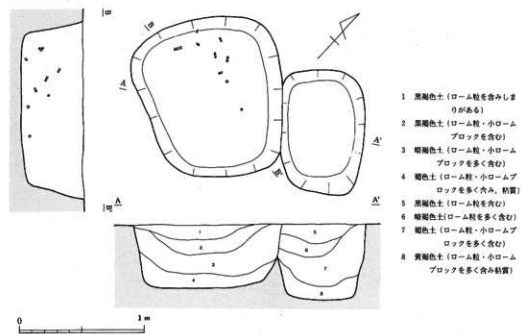
隅に集中していた(第12図)。以下、これら墓壇の特徴や出土物について整理する。

**平面形と大きさ** 平面形は楕円形が最も多く、その他円形あるいは隅丸方形気味のものもみられる。平面の大きさは長径でみれば80cm前後のものから140cm前後のものまでやや幅がみられるが、1m前後になるものが多いようである。一方、検出面からの深さは10数cmのものから1m前後のものまでかなり差がある。また、特異な形態としては、112号や117号のように二段掘りになっているもの、126号や132号のように底面に小ピットがあるもの、さらには122号~125号のように深みをもって僅かに袋状を呈しているものなどがみられる。

**遺物の出土状態** 図示したものは、遺物が検出された8基のうち117号と101号の出土状態である。117号からは中央部やや南寄りの位置で2個(一対)の袂状耳飾が出土している。2個の間隔は15~16cmで底面からは10cm前後の高さである。101号からは中央から北東部にかけて各種9個の玉が集中して出土している。底面からの高さは数cmから30cm近くとかなり高低差がみられるわけであるが、この高低差から側面図を復元すると、



第13図 117号墓壇遺物出土状態



第14図 101号墓壇遺物出土状態

北東寄りの5～6個が楕円状の輪を形づくっている状況がみえる。このように、117号の場合は耳飾りとして、また101号の場合はおそらく首飾りとして、それぞれ身に付けられたまま葬られた状況を示すものであろう。

出土遺物 8墓塚の出土遺物の内容は、下表に示すとおりである。なお、玦状耳飾・玉類および石器の一部については、現在石質を検討中である。

墓塚名	番号	種類	大きさmm	色	石質	墓塚名	番号	種類	大きさmm	色	石質
100号	1	玦状耳飾	52×42×5	緑白色	検討中	110号	4	石鏃	28	緑白色	流紋岩
	2	玦状耳飾	51.5×44×5	乳白色	-		114号	1	管玉	72×11-14.5	乳白色
101号	1	管玉	54×11-13.5	乳白色	-	2		管玉	69×10-13.5	乳白色	-
	2	管玉	38×8-10	乳白色	-	3		管玉	64.5×12-15.5	乳白色	-
	3	管玉	33×11	乳白色	-	4		管玉	62.5×12-13.5	乳白色	-
	4	管玉	27×9-12	乳白色	-	5		管玉	54.5×10-14	乳白色	-
	5	管玉	27×9.5	乳白色	-	6		管玉	36×9-11.5	乳白色	-
	6	管玉	22×9	乳白色	-	7		小玉	14.5×13	乳白色	-
	7	管玉	22×9	乳白色	-	8		小玉	10×10	乳白色	-
	8	丸玉	23.5×23	乳白色	-	9		小玉	9×10.5	乳白色	-
	9	丸玉	20.5×20.5	乳白色	-	10		小玉	5×11	乳白色	-
104号		石砦	56	白色	流紋岩	11	小玉	6.5×11.5	灰緑色	-	
106号		石砦	64	褐色	検討中	12	石砦	59	赤褐色	チャート	
110号	1	石砦	53	乳白色	石英	117号	1	玦状耳飾	62×59×4	濃緑色	検討中
	2	石鏃	24	灰緑色	チャート		2	玦状耳飾	61×54×4.5	濃緑色	-
	3	石鏃	25	灰緑色	チャート	118号		石鏃	27	灰緑色	チャート

※ 大きさの順は、玦状耳飾が長径×短径×厚さ、玉類が径×高さ、石砦・石鏃が長さ。なお、管玉で中央部が細くなるものは長さ×最小径-最大径。

第7表 墓塚出土遺物一覧

## 6 集石

広場部分のほぼ全域から礫が検出されている。特に集中し遺構としてとらえられるような部分は見られないが、全体的には墓塚の分布と関連するようであり、住居・建物群跡寄りで密度が濃く、内側に行くに従って密度が薄くなる傾向がみられる。ただし密度が濃い部分でも1㎡にせいぜい3～4個であり、量的には少ないものである。また、礫の大きさは径数cmから40cm近いものと様々であるが、割合としては拳大ぐらいのものが多くいようである。

これら、礫群の中には相当数の石器が混在している。石器の約8割は礫石類またはその破片であり、その他石皿・石鏃等が少量みられる。しかし、ここでも整穴住居跡の状況と同様で、石斧類は検出されない。また、その他のものとしては、ほぼ全域に黒曜石の小割片の散布がみられる。

なお、石器類も含めて礫群の中には火を受けたものが目に付く。全体からみるとこの割合は1割に満たないぐらいであるが、分布範囲はほぼ全域にわたっている。



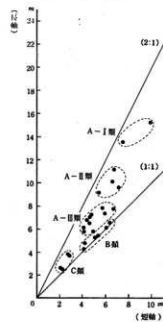
## IV まとめ

ここでは、これまで記してきた調査の概要をもとに、遺構・遺物および集落の特性をもう一度まとめ、最後に問題点および今後の見通しなどを整理しておくことにしたい。

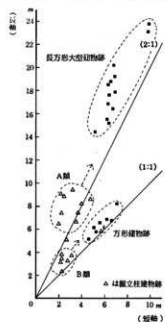
### 1 遺構について

大きくは竪穴住居跡、長方形大型建物跡、方形建物跡そして圓柱建物跡という4つの建物遺構の認識あるいは広場部分はほぼ全域におよぶ墓塚の確認、また細かくは建物跡における坪の有無さらには圓柱建物における特異な形態など本集落跡における遺構の問題は豊富である。しかし、この概報の段階ではこれらについて一つずつ触れて行くことはできない。そこで今回は比較的客観性があり、しかも本集落跡を最も特色付けるものの一つと思われる大型の住居・建物群についてのみまとめておくことにしたい。

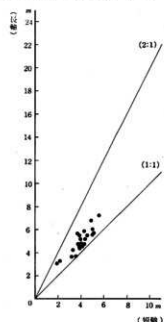
まず、竪穴住居跡は長軸2m代ものから15m代ものまでと大小差が激しく、床面積でみれば最大のJ-5号は最小のJ-29号の約30倍にもなっている。前節ではこの規模について形状と組合せながら5つに分類した。第15図はこれをグラフに表わしたものであるが、ここで気になるのはやはり大小を分ける基準である。とび抜けて大きいA-I類は別にしても、A-II類からC類までの分布は一連ととらえられないこともない。つまり、A-I類以外は大型ととらえる必要はない、あるいは分布の中心以上すなわちA-III類の真中あたり以上は相対的に大型と考えてよい、というよ



第15図 根古谷台遺跡の竪穴住居跡



第16図 根古谷台遺跡の建物跡



第17図 栃木県内の縄文前期住居跡

うなことでいろいろな見方ができてしまうことである。そこで参考になるのは、第17図に示した栃木県内における縄文時代前期竪穴住居跡の規模の状況である。ここに取り上げた22例は13の遺跡にわたり、時間的にも本集落跡の前後まで含んでいるわけであるが、グラフに現われた分布の集中度は本集落跡よりも明らかに強い。つまり、この分布範囲は通常の竪穴住居跡規模の一つの基準としてとらえることができるものである。このような見方に立つと、A-Ⅲ類およびB類はやや大ぶりなものを含むものの通常の範囲の中で理解できるものであり、A-Ⅰ類およびA-Ⅱ類を大型としてとらえることに客観性がおびてくる。なお、C類の一部が逆に通常の範囲を下まわっていることも注目される。

次に竪穴住居跡ということで遺構的に関連性をもつとみられる長方形大型建物跡、方形建物跡そして竪立柱建物跡の規模の状況を見てみたい(第16図)。まず、長方形大型建物跡の規模の卓越性は明瞭であり、最小のものでも竪穴住居跡A-Ⅰ類に匹敵する。これに対し方形建物跡は竪穴住居跡で言えばいずれも通常の範囲に入っている。竪立柱建物跡は2・3の例外を除き3間×1間や2間×2間の大型(A類)と1間×1間の小型(B類)に分かれるわけであるが、ここに示した規模は確認された柱間輪郭の大きさであり、実際の建物は一回り大きくなることも考えられる。つまり、竪立柱建物跡のA類に関しては、長方形大型建物跡に連続する規模を有した大型の建物跡ととらえることができるわけであり、これは形状的にも長方形という点でつながりが深いものとみられる。なお、同様に竪立柱建物跡B類を方形建物跡につながりをもたせて考えることも可能である。

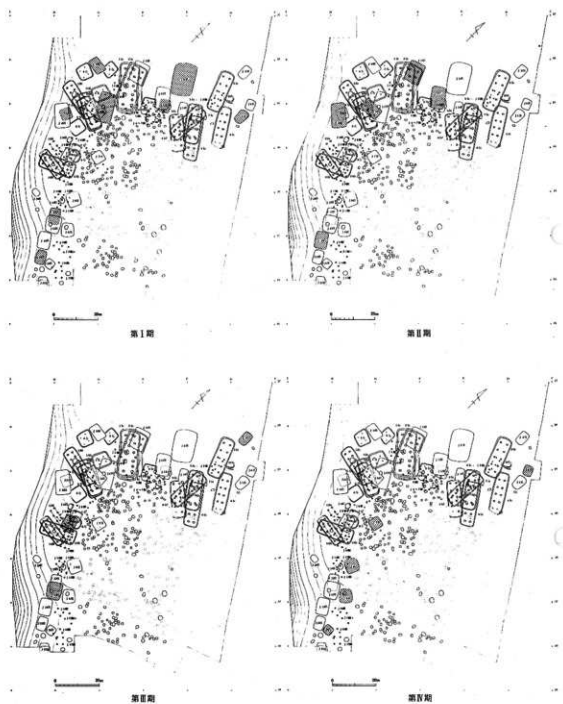
さて、以上のようにみえてくると、本集落跡検出の住居・建物跡総数69のうち、ある程度客観的に大型ととらえられるものは30(竪穴住居跡A-Ⅰ類が2軒、同A-Ⅱ類が4軒、長方形大型建物跡15棟、竪立柱建物跡A類9棟)にもほり、その数は全体の4割をこえている。

## 2 遺物について

前記したとおり、出土遺物についての細かな整理・分析等は今後進めて行く予定である。従ってここでは、現段階で指摘できる大まかな様相についてだけ簡単にまとめておくことにしたい。

**土器** 竪穴住居跡を中心に遺構に伴出するとみられるものの大部分は縄文時代前期中葉に位置付けられる黒浜式土器であり、その内容は黒浜式期の古段階から新段階のほぼ全般にわたるとみられる。また、これらの中には中部高地に祖型をもつと言われる所謂有尾系土器や東北地方南部の大木2a式土器の影響を強く受けたとみられる土器群等が含まれており、広範な交流の実態を物語っている。

**石器** 竪穴住居跡および広場内を中心に、敲石(敲石・磨石・凹石等)類、石皿、石鏃、石鏃、スクレイパー、石匙(縦型と横型)等の石器が出土している。現段階でこれらの正確な数量を提示することはできないが、敲石類の圧倒的な多さは目立ち、全体の約8割を占めているものとみられる。また、石斧類がほとんどみられないことは、一つの大きな特徴として指摘できる。なお、広場内のほぼ全域からは、黒曜石の小削片が相当数出土している。



第18図 根古谷台遺跡壁穴住居跡の変遷

**堅果類** 多い少ないはあるものの7～8割の竪穴住居跡から炭化したクルミ、クリ等が検出されている。このことは前記した石器の中で食物加工具として考えられる巖石類が、圧倒的な量を占めている状況とも呼応している。

**墓塚の遺物** 8基の墓塚から出土したものは、袂状耳飾が2対4点、菅玉・丸玉・小玉等の玉類が合計20点、石彫(いずれも縦型)が4点、石鏡が4点である。この中で多種・多数の出土をみせた玉類は、前期のものとしては全国的にも極めて類例の少ないものとみられる。取りわけ乳白色の石材を用いて中央部を細く仕上げた菅玉は特異であり、骨製品との関連を想像させる。また袂状耳飾については、石製に限れば、県内におけるこれまでの出土例は僅か6点<sup>2)</sup>であり、しかも本例のように墓塚に伴ったものは初めてである。

### 3 集落の変遷

今回検出された69にのぼる住居・建物跡群は、一つの広場を形成したという点で一連のものであることは容易に想定される。しかし、どの住居・建物跡が共存したのか、墓塚群がどのように形づくられていったのか、すなわち集落の景観がどのように移り変っていったかをみきわめることは容易なことではない。特に土器の伴出が極めて少ない長方形大型・方形・屈立柱の建物跡については、重複による新旧関係は判断されるものの、建物跡どうしの共存関係を物的に立証するものはみあたらない。従って、比較的伴出土器の多い竪穴住居跡の変遷はおおまかにおさえられるものの、他の建物跡の位置付けについては可能性を指摘するだけにとどめざるを得ない。ところで、竪穴住居跡どうしの重複関係については、4例(J-13号→J-12号、J-17号→J-16号、J-21号→J-20号、J-22号→J-23号)が確認されている。基本的にはこの新旧関係を前提として本集落跡の土器の変化を明らかにし、それをもとに住居跡群の変遷を分析・検討しなければならないわけである。しかし、今回は再三記してきたように十分な整理を行ってない段階での報告である。そこで、ここでは、将来に向けて一つの方向性を提示するという意味から、現在、精力的に黒浜式土器の細分を検討されている新井和之氏の編年<sup>3)</sup>に基づくことにしたい。

さて、新井氏の編年に照し合えると本集落跡の黒浜式土器は、大略4期に区分することができる。住居の変遷と土器の変化がかならずしも一致しないことは言うまでもないが、例えばJ-6号・J-22-24号住居跡あたりの重複・接近の状況は少なくとも3時期の設定が必要なものであり、全体で4時期区分という設定は、それら重複や配置の状況からもそれほど無理のないものと思われる。また、もちろん新井氏の編年は本集落跡で確認された新旧関係と矛盾するものではない。以上のような考えから、竪穴住居跡を4時期に分けると次のようになる。

第Ⅰ期 J-1号・J-5号・J-10号・J-13号・J-17号・J-21号・J-22号・J-25号  
住居跡の8軒。

第Ⅱ期 J-11号・J-12号・J-16号・J-20号・J-24号住居跡の5軒。

第Ⅲ期 J-2号・J-18号・J-23号住居跡の3軒。

第Ⅳ期 J-4号・J-6号・J-7号・J-8号・J-26号住居跡の5軒。

時期不明 J-14号・J-15・J-27号・J-28号・J-29号・J-30号住居跡の6軒。

この時期区分に従って竪穴住居跡の変遷を図化したのが第18図である。ここで、本集落跡を特徴付けるもの一つである大型の竪穴住居跡に注目すると、前半の第Ⅰ・Ⅱ期だけにしかみられないことがわかる。この傾向は時期不明とした6軒がいずれも小ぶりであることから変ることのないものであり、Ⅲ期を境に竪穴住居跡からみた集落の景観が大きく変わっていることが指摘できる。なお、大型の竪穴住居跡自体も、Ⅰ期からⅡ期へと小型化(A-Ⅰ類→A-Ⅱ類)する傾向にあることもわかる。

さて、以上のような状況から、長方形大型建物跡の位置付けについて一つの想定をすると、竪穴住居跡変遷の第Ⅲ期を中心に展開した可能性が強いものと考えられる。これは前記した竪穴住居跡景観の大きな変化に加えて、重複関係にある場合常に第ⅡあるいはⅢ期の竪穴住居跡を切っている(J-11号住居跡→2号、J-16号住居跡→11号、J-18号住居跡→13号)ことから言えることである。つまり現像的には大型の竪穴住居跡の小型化・消滅と相まって長方形大型建物跡が中心となっていくという状況がとらえられるわけである。なお、方形建物跡・掘立柱建物跡に関しては、長方形大型建物跡との重複関係においていずれの場合も新しくなっている(3号長方形大型建物跡→10号方形建物跡・J-3号掘立柱建物跡、1号長方形大型建物跡→J-1・2号掘立柱建物跡、11号長方形大型建物跡→1号方形建物跡、12号長方形大型建物跡→5号方形建物跡、13号長方形大型建物跡→J-10号掘立柱建物跡)こと、さらに掘立柱建物跡については第Ⅳ期の竪穴住居跡を切っているもの(J-8号住居跡→J-12号、J-26号住居跡→J-16号)もあることなどから、全体的に後出するものと考えられる。

#### 4 問題点の整理

以上遺構・遺物そして集落の変遷ということで何点か特徴的なことをまとめてみたわけであるが、これらはそのまま問題点として指摘されるものであり、今後の整理・分析作業を進めて行く中でさらに検討・修正を加えて行かなければならないものである。最後にこれらも含めて、本集落跡における問題点のいくつかを整理し、本報告への見通しとしたい。

○ 再三記してきたとおり、本集落跡を最も特色付けるもの一つは大型の住居・建物跡群である。この大型住居(建物)跡については東北・北陸・北海道を中心に分布し、時期的には早期までさかのぼることが知られている。従って、北関東に位置する本集落跡は、大きくはこのような分布圏と大型化という流れの中に位置付けていくのかもしれない。しかし、本集落跡の場合大型のものが多数群を成して検出されたこと、さらに遺構的に異なる3種類の大型建物(大型の竪穴住居跡、長方形大型建物跡、大型の掘立柱建物跡)の存在が確かめられたことで、これまでにない独特のものと言える。このような状況は、今回触れることはできなかったがこれら大型の住居・建物跡の機能という点とも関連して大きな検討課題と言える。

○ 本集落跡は、住居・建物跡群が環状あるいは馬蹄形に並び内部に墓域を配するという定形的な縄文集落の姿をとっているわけであるが、前記した大型の住居・建物跡も含めていろいろな形態の建物遺構がみられることで注目される。そこには当然住居以外を目的とした特殊な機能をもつ建物の存在が想定されるわけであり、本集落跡自体の性格を考える上でも重要な問題点と言える。

○ 墓域については不明瞭な点が多いものの、遺物を出土するものとしがないものがあること、これと関連して掘り方のしっかりしたものやそうでないものがあること、さらには配列に一定の法則のようなものがみられることなど、いくつかの興味深い状況が確かめられている。集団における人々のつながり方がある意味では最もよく反映しているものとして、これらの分析は重要な意味をもってくるものと思われる。

註

① 填静夫氏の集成されたもの(『第2節 縄文時代』『宇都宮市史』第1巻 昭和54年)をもとにし、最近のものについては次の文献を参考にした。

宇都宮市教育委員会【上欠南遺跡】昭和61年3月

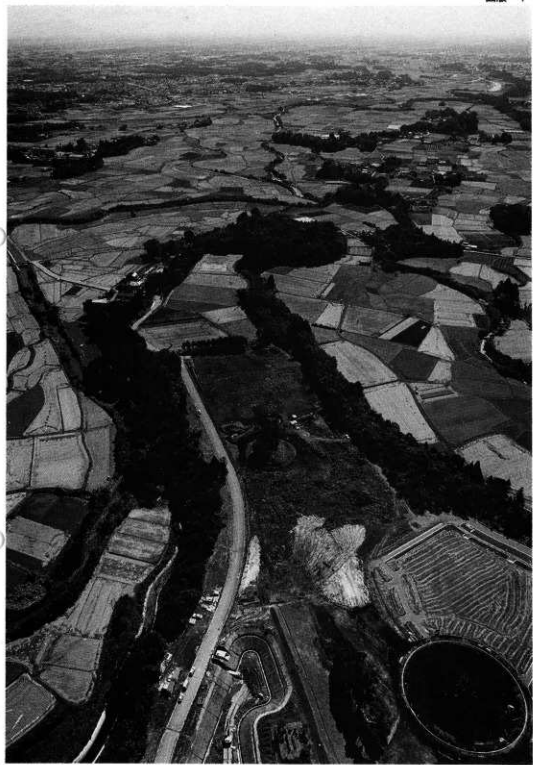
中山首・石橋知明【下坪遺跡】『新木県埋蔵文化保護行政年報』新木県教育委員会 昭和60年3月

三澤正善・大塚昌彦【乙女不動原北浦遺跡B地点発掘調査報告書】小山市教育委員会 昭和62年3月

② 上野修一氏の御教示による。

③ 新井和之【黒浜式土器】『縄文文化の研究』3 尾山閣 昭和56年他。なお、氏には再三にわたって土器を実見していただき、御教示を賜った。記して感謝の意を表する。

写真図版



横古谷台遺跡遺景（北西上空から）





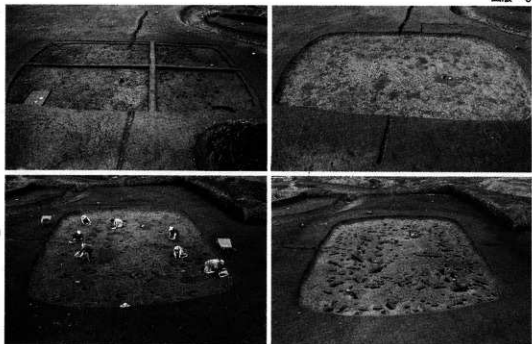
根古谷台遺跡遺景（東上空から）



横古谷台遺跡近景（北西上空から）



横古谷台遺跡全景



(1) J-5号住居跡調査の経過



(2) J-5号住居跡 (東から)



(1) J-12号住居跡 (東から)



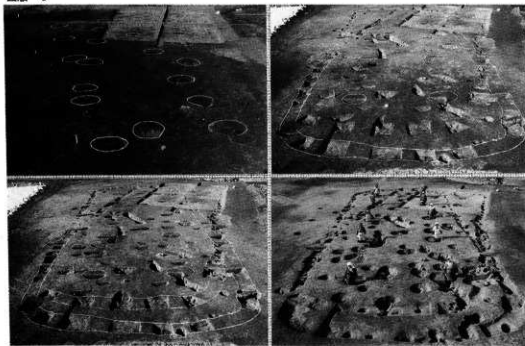
(2) J-20号住居跡



(1) J-7号住居跡 (東から)



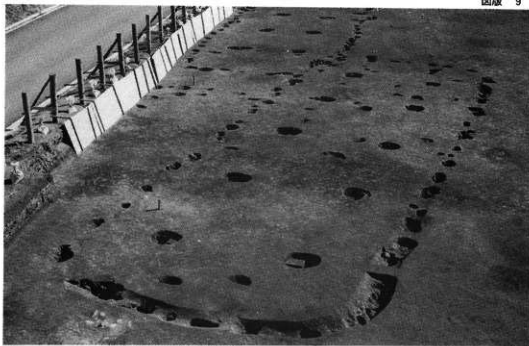
(2) J-22~27号住居跡 (北から)



(1) 1・2号長方形大型建物跡調査の経過



(2) 1・2号長方形大型建物跡 (南から)



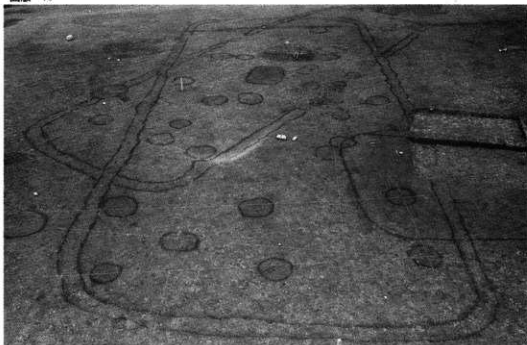
(1) 3・4号長方形大型建物跡（北西から）



(2) 5～7号長方形大型建物跡（北から）



図版 10



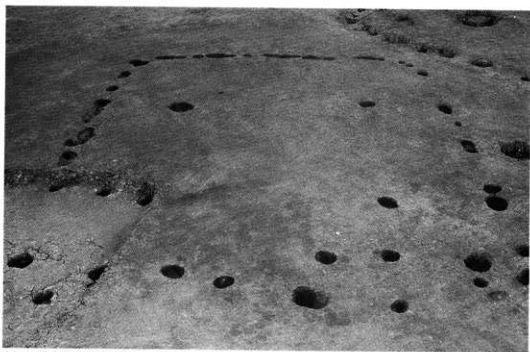
(1) 13・14号長方形大型建物跡の確認状況（東から）



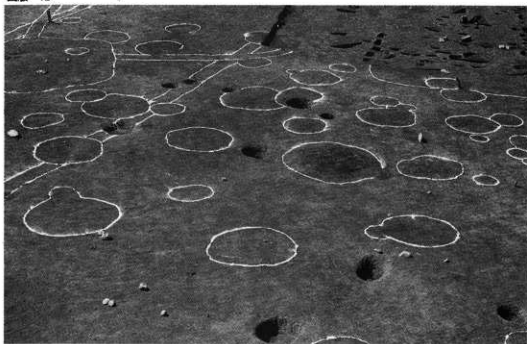
(2) 13・14号長方形大型建物跡（東から）



(1) 1号方形建物跡 (北西から)



(2) 3号方形建物跡 (南から)



(1) 4号掘立柱建物跡の確認状況 (南東から)



(2) 4号掘立柱建物跡 (東から)



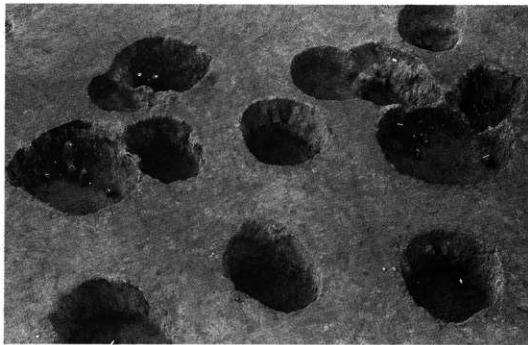
(1) 住居・建物跡群の重複 (北西から)



(2) 広場の集石 (北から)



(1) 広場北西隅の墓群確認状況 (北から)



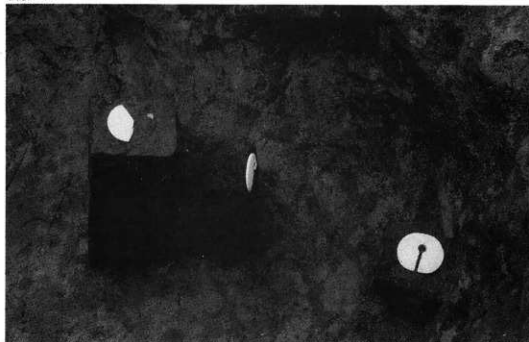
(2) 広場北西隅の墓群 (南から)



(1) 101号墓墳玉類出土状態 (南から)



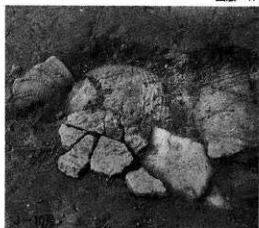
(2) 114号墓墳玉類・石趾出土状態 (南西から)



(1) 100号墓埴状耳輪出土状態 (北から)



(2) 117号墓埴状耳輪出土状態 (東から)



(1) 住居跡の土器出土状態

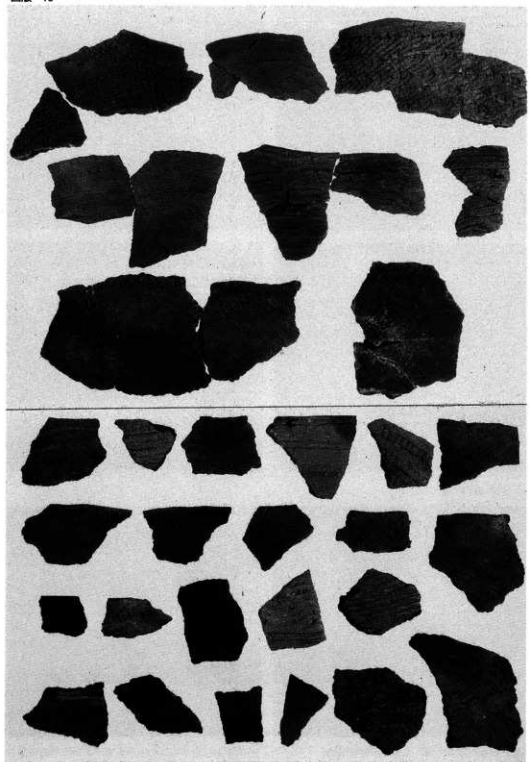


(2) 石甕の出土状態 (J-23号住居跡)

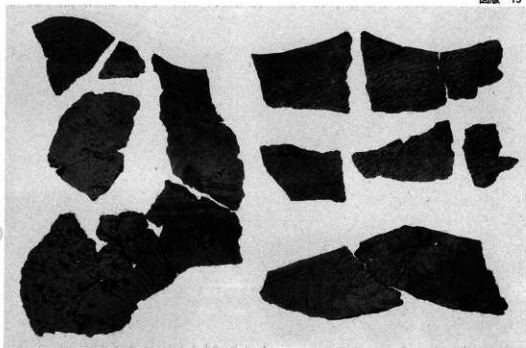


(3) 炭化したクルミの出土状態 (J-12号住居跡)

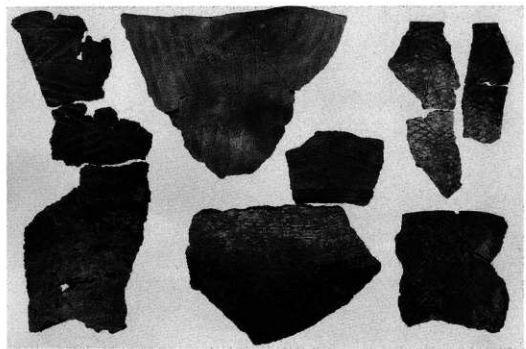




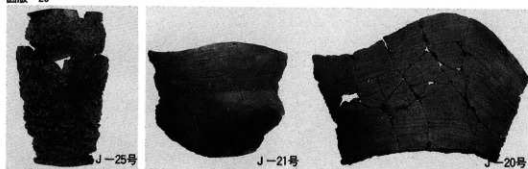
J-5号住居跡出土土器



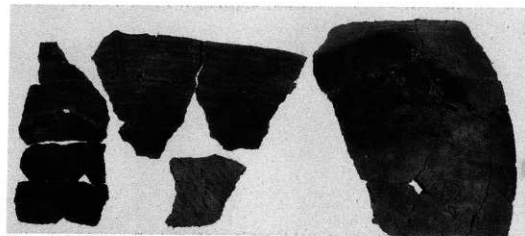
(1) J-10号住居跡出土土器



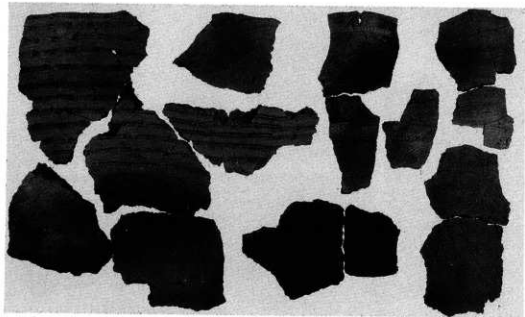
(2) J-24号住居跡出土土器



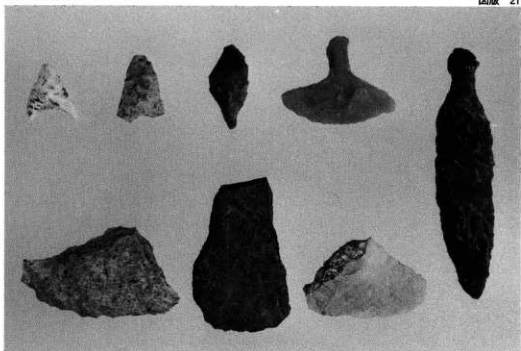
(1) 住居跡出土土器



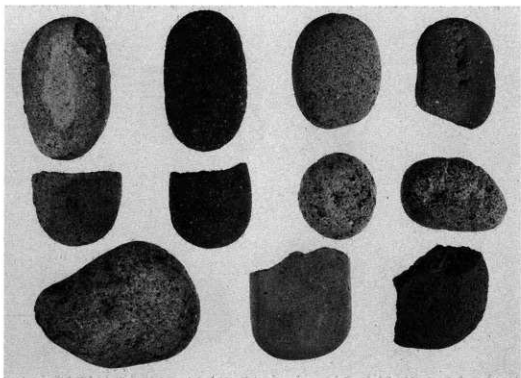
(2) J-23号住居跡出土土器



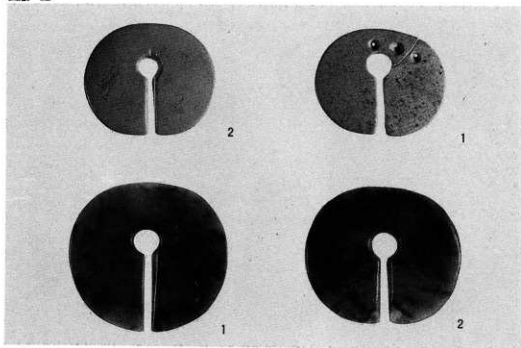
(3) J-6号住居跡出土土器



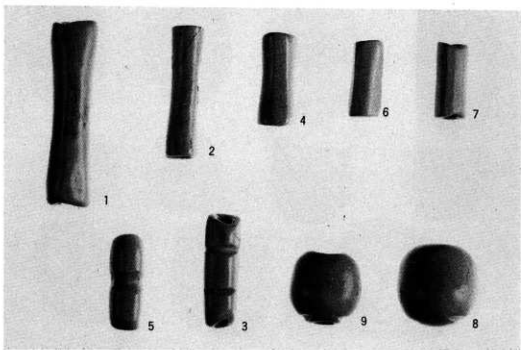
(1) J-5 号住居跡出土石器(1)



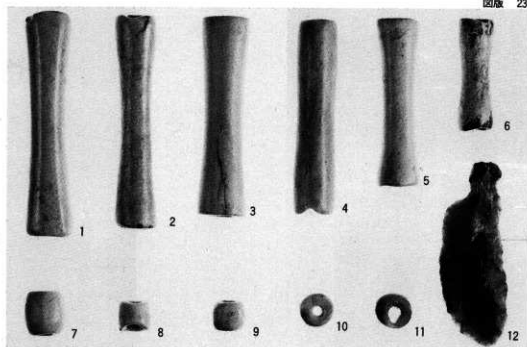
(2) J-5 号住居跡出土石器(2)



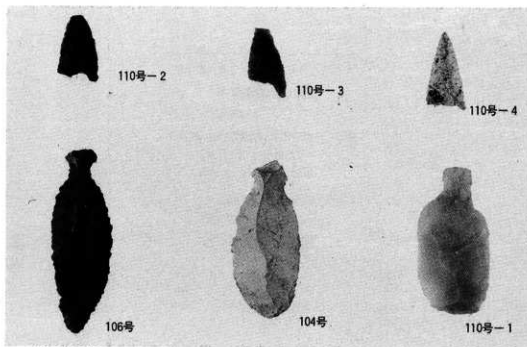
(1) 墓坑出土玳瑁耳饰 (上 100号墓坑, 下 117号墓坑)



(2) 101号墓坑出土玉珮



(1) 114号墓出土玉器·石器



(2) 墓出土石器

---

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第24集

**聖山公園遺跡Ⅴ**

昭和63年2月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市旭1丁目1番5号)

TEL (0286)32-2747

印刷 朝松井ビ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511

---